



気になる子どもの 早期発見・早期支援

「かかわり指標」を活用した
根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて

Anne Tokie

安梅 勅江 編著



日本小児医事出版社

Manual



気になる子どもの 早期発見・早期支援

「かかわり指標」を活用した
根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて

Anne Tokie

安梅 勅江 編著



日本小児医事出版社

Manual



気になる子どもの 早期発見・早期支援

Manual

活用マニュアル



「かかり指標」を活用した
根拠に基づく子育て・子育て支援に向けて



子どもの育ちをめぐるさまざまな課題が山積する昨今、保育園や幼稚園、保健センター、療育センターなど子育て支援場面における気になる子どもの早期発見、早期支援が、ますます重要性を増している。しかし実践の場で子どもの「かかわりの特徴」を簡単に把握し、支援に生かす方法は、必ずしも適切なものが存在しない。

子どもの社会能力の発達には、さまざまな「個性」がある。これら個性を十分に発揮する環境を整備するとともに、「子どもの社会能力」および「かかわりの特徴」を日常的な場面で評価し支援に活用することは、実践においてきわめて意義深い。

本指標は、国際的に社会能力の構成要素として最も広く活用されている「自己表現 (assertion)」「自己制御 (self-control)」「協調 (cooperation)」の枠組みを用い、追跡調査により信頼性と妥当性が明示されたツールである。文部科学省科学技術振興機構のコホート研究や、厚生労働科学研究などの研究領域をはじめ、保健、医療、福祉、保育、心理、教育などの実践領域での活用実績がある。

また実践でのさらなる活用を意図し、観察法の「かかわり指標」との妥当性を確認した質問紙法の「幼児用社会的スキル指標」を紹介した。

本指標は、子育て支援に携わる専門職、研究職、行政職、学生が、下記のような実践、あるいは研究、学習のツールとして容易に活用できる。

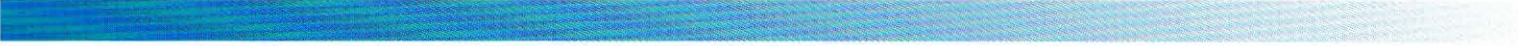
- 1) 専門職が子育て支援として子どもの社会能力やかかわりの特徴を把握し、支援に活用する実践ツール
- 2) 研究者が研究に活用する標準化された評価ツール
- 3) 学生が子育て支援についての技術を取得する学習ツール

本書は大きく3つの柱より構成されている。1) 意義と実施方法、2) 科学的な根拠、3) 具体的な実践例、である。

<意義と実施方法>では、「第1章 気になる子どもの早期発見・早期支援と「かかわり指標」活用の意義」で発達の視点および医学的視点で捉えた気になる子どもの特徴、早期発見、早期支援に向けた「かかわり指標」活用の意義と特徴、理論背景、「第2章 「かかわり指標」の内容」は枠組みと評価項目、さらに「第3章 実施方法」でさらに詳細に実施方法と具体的な評価基準を紹介した。

<科学的な根拠>では、「第4章 科学的な根拠」をさまざまな研究成果をもとに整理した。さらに「第5章 質問紙を用いた気になる子どもの早期発見：「幼児用社会的スキル指標」」としてさらに実践での活用が容易な質問紙法を紹介した。

<具体的な実践例>では、「かかわり指標」を用いた早期発見、早期支援の具体的な方法とポイントを自閉症傾向、広汎性発達障害傾向、注意欠陥多動性障害傾向、知的障害傾向、虐待傾向の事例をあげて解説した。巻末には「かかわり指標」、英語版の「かかわり指標」、活用方法、「幼児用社会的スキル指標」に関する情報を添付した。今後さらにさまざまな実践領域、ある



いは国際比較研究等での活用が求められる。

「かかわり指標」は、子どもの社会的な相互作用の質を短時間の行動観察により客観的に測定できるという点において、他に類を見ないツールであり、さまざまな発展の可能性を秘めている。

根拠に基づく子育て・子育て支援の展開に向け、実践の場で早期発見、早期支援につながる有効な評価指標として、あるいは研究ツール、学習ツールとして、「かかわり指標」の今後の活用が大いに期待される。

筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授 あんめ ときえ 安梅 勅江

まえがき	1
第1章 気になる子どもの早期発見・早期支援と「かかわり指標」活用の意義	5
第1節 発達の視点からみた気になる子ども	5
第2節 医学的視点からみた気になる子ども	8
第3節 「かかわり指標」活用の意義と特徴	12
第4節 理論背景	14
第2章 「かかわり指標」の内容	17
第1節 枠組み	17
第2節 評価項目	17
第3章 実施方法	19
第1節 実施方法	19
第2節 評価基準	21
第4章 科学的な根拠	23
第1節 発達心理学的な妥当性	23
第2節 信頼性と基準関連妥当性	28
第3節 気になる子どもの判別妥当性	31
第4節 得点分布と年齢別推移	34
第5章 質問紙を用いた気になる子どもの早期発見：「幼児用社会的スキル指標」	38
第6章 実践例	40
第1節 自閉症傾向の事例	40
第2節 広汎性発達障害傾向の事例	42
第3節 注意欠陥多動性障害傾向の事例	44
第4節 知的障害傾向の事例	46
第5節 虐待傾向の事例	48
◆参考資料	51
Appendix 1 「かかわり指標」	52
Appendix 2 Interaction Rating Scale (IRS10) 「かかわり指標」英語版	53
Appendix 3 Information of Interaction Rating Scale (IRS) : Description of Measure 「かかわり指標」活用説明 英語版	54
Appendix 4 「幼児用社会的スキル指標」	56
索引	57
謝辞	59
執筆者	60



第1章

気になる子どもの早期発見・早期支援と 「かかわり指標」活用の意義

第1節 発達の視点からみた気になる子ども

1. 気になる子どもとは

近年、「**気になる子ども**」の理解と支援に対する取り組みへの関心が高まっている。「気になる子ども」とは、知的側面には顕著な遅れは認められないにもかかわらず、落ち着きがない、感情をうまくコントロールできない、他児とトラブルが多い、などの行動特徴を持つ子どもたちを指す。すなわち、主体性、応答性、共感性、感情制御、運動制御といった社会的スキルの発達に何らかのつまずきをもつ子どもたちであると考えられる。「気になる子ども」には、個性や家庭環境によるもののほか、広汎性発達障害（アスペルガー症候群など）、注意欠陥多動性障害（AD/HD）、学習障害（LD）など子ども自身の障害に由来するものも含まれる。

一方、子どもの発達は子ども自身が持つ個体要因と、家庭・地域などの環境要因との複雑な相互作用のもとに営まれるものであるため、子どもの問題行動の原因をどれかひとつに特定することは難しい。そもそも、子どもたちにまつわる問題を考えるときに、「問題児」というような表現を使わず「気になる子ども」と呼ぶのは、子どもの行動に関する問題点を子どもたち自身の中だけに見出そうとするのではなく、子どもを取り巻く環境を手がかりに、生態学的な視点からこれらの問題を考えようとする姿勢が反映されている。問題そのものが子ども自身の中にあるのではなく、子どもたちと、子どもたちを取り巻く物理的・社会的環境との「**かかわり**」（コミュニケーション）のありかたにこそ問題点があり、それが私たち大人には「気になる」ものに映るのである。

ゆえに、子どものコミュニケーション能力を評価する際には、生態学的環境のもとで、他者との「かかわり」を通じてありのままの子どもの行動を観察する必要がある。とりわけ発達初期においては、家庭環境要因、中でも養育者との関係性の質が重要であるといえるだろう。

そこで次に、乳幼児期の社会能力の発達を支える環境要因としての養育者のかかわりの重要性について述べる。

2. 子どもの社会能力の発達を支える養育者の役割

発達初期においては、気質や周産期リスクなどの子どもの個体要因と、もっとも身近な社会的環境要因としての養育者のかかわりが互いに作用しあう中で、両者の間に**アタッチメント**（特定の個体に対して持つ情愛の絆）¹⁾が形成される。

安定したアタッチメントの形成には、養育者が子どもに対して素早く、一貫性を持って、適切に応答する、という「**敏感性 (sensitivity)**」の高いかわりが重要であることが、さまざまな文化のもとで行われた数々の研究によって報告されている²⁾。

また、「**相互同期性 (interactional synchrony)**」と呼ばれる特別なコミュニケーションの形態も、安定した親子関係の形成に重要な役割を果たすと言われている。相互同期性は、養育者がタイミングよく、リズムカルに、適切な方法で子どもからのシグナルに応じることで、「**情動のダンス**」とも称される。情動の中でも特にポジティブな情動を一致させることが重要である³⁾⁴⁾。

逆に、子どもとの**アタッチメント**が安定していない養育者は、子どもに対する敏感性、応答性が低く、子どもの主体性の尊重に欠ける傾向が見られる。具体的には、子どもへの身体接触が少なく、かわり方がぎこちなくルーチン的で、時にはネガティブに、怒ったり拒否的になったりすることが多いという⁵⁾⁶⁾。また、子どもがよそ見をしていたり寝ている時にも盛んに話しかけるなど、過剰な刺激を与えたり、押し付けがましいかわりをする場合もある。その他、子どものシグナルに対しては応答的ではないにもかかわらず、子どもが探索活動を始めると子どもの注意を自分に引き戻そうとして干渉するなど、一貫性のないかわりをする場合も見られる³⁾⁷⁾。養育が極端に不適切な場合、すなわち虐待やネグレクトは、かなり高い確率で子どもとの関係性を崩壊させる⁸⁾。

一方、アタッチメントは養育者と子どもの中に形成される関係性の結果であるので、子どもの側の特徴もそのありかたを規定する重要な要因である。早産、出生時の合併症、新生児期の疾病、気質の難しさなどは、養育を困難にし、養育者と子どもの関係性を損なう要因となる可能性がある。しかし、子どもが扱いにくい気質やその他の困難な特徴を持っていても、養育者が子どもを肯定的に捉え、子どもに特別な配慮が必要であることを理解し、敏感にかかわることができれば、たいていは安定した関係性を築くことが可能となる⁹⁾。そのためには、養育者と子ども双方に対する早期支援が重要な役割を果たすであろう。

さらに、養育者との安定したアタッチメントは、のちの仲間関係など対人関係のあり方を規定する**内的ワーキングモデル (internal working model)**¹⁰⁾として作用し、コミュニケーションに必要な社会的スキルを育むと考えられている。内的ワーキングモデルとは、「養育者が自分に対してどのような情緒的かわりをしてきたか」ということに関するイメージと、「自分が養育者に働きかけたとき、どのように応じてもらったか」ということについてのイメージに関する認知構造を指す。

つまり、発達初期に子どもが養育者から敏感なかわりや適切な応答を受けることで、「自分は、周りの人に見守ってもらっている」という肯定的な自己イメージや、「周りの人は、自分が働きかけたときにはいつでも応じてくれる」という他者への信頼感を育む基盤を形成するのである。養育者から肯定的で情愛に満ちた、敏感で応答的なかわりを受けてきた子どもは、その養育者に対する信頼感を形成すると同時に、自分に対する信頼感、他者に対する信頼感を幅広く形成することにつながるため、主体的に自信を持って他者にかかわり、社会関係を築くことができるようになる。また、新しい事象に遭遇した場合も、信頼できる養育者の表情から

情緒的な情報を得ることで、その事象に対し自分がいかに反応し、行動すべきであるかを学ぶ。これは**社会的参照 (social referencing)** と呼ばれる。これによりさらに子どもの積極的な探索活動が促され、子どもの認知能力が育成される。

それゆえ、内的ワーキングモデルは、生涯にわたる親密な人間関係のモデルとなるほか、認知・情動系をコントロールする情報処理システムとして機能し、パーソナリティ形成に極めて重要な役割を果たすといえる。

それに関連して、養育者と子どもの安定した関係性は、子どもの共感性や感情制御、行動の制御のありかたにも寄与すると考えられている。自分で外界のストレスを調整したり感情表出を制御できない乳幼児に対しては、養育者が子どもの感情についての手がかりを敏感に読み取り、共感的に応じてストレスを調整したり、強い感情や運動を沈静するようなかかわりをする中で、子どもは他者に対する共感的行動のパターンを身につけると同時に、自己制御のしかたを学ぶ機会を得る。それによって子どもはストレスを受けても動揺しにくく、なだめやすくなり、積極的に外界の探索活動を行えるため、社会的スキルも身につけやすくなる。逆に、子どもの強い感情表出に対して養育者が大声でどなる、しかるなどの対応をしたり、子どもが取り乱してもなかなか介入しない場合、子どもは感情制御のしかたを学ぶ機会は得られず、突発的に強い感情を出すようになる¹⁾。つまり子どもは、養育者が自分に対して行ってきたかかわりのパターンをモデルに、感情や行動の自己制御のしかた、他者の感情表出への反応のしかたを学んでいるといえる。

3. まとめ

本節では、発達初期の子どもにとってもっとも重要な環境要因のひとつとしての養育者のかかわりについて述べた。ここでは、養育者と子どもの調和の取れた関係性の形成には「**かかわり指標**」の養育者側面で評価される、**子どもに対する主体性、応答性、共感性、認知発達、社会情緒発達への配慮**、といった行動が重要な役割を果たしていることが改めて確認された。さらに、養育者との安定した関係性を基盤に、子どもの主体性、応答性、共感性、感情制御、運動制御といった社会能力の基盤が育まれるのである。

「かかわり指標」を用いることで、子どものかかわりの特徴、すなわち社会能力の発達、およびそれに影響を与える養育者のかかわりの特徴を相互に関連付けながら把握することができる。また子育て支援の場に活用することで、「気になる子ども」や養育者のかかわりにおける課題を早期に発見し、早期支援を行うことが可能となるであろう。

文 献

- 1) Bowlby, J. Attachment and loss. Vol 1. Attachment. New York Basic Books. 1969.
- 2) De Wolff, M. S. van IJzendoorn, M. H. Sensitivity and Attachment: A Meta-Analysis on Parental Antecedents of Infant Attachment. Child Development, 1997 ; 68 : 571-591.
- 3) Isabella, R. A. Belsky, J. Interactional Synchrony and the Origins of Infant-Mother Attachment: A Replication Study. Child Development, 1991 ; 62 : 373-384.
- 4) Kochanska, G. Mother-Child Relationship, Child Fearfulness, and Emerging Attachment: A Short-Term Longitudinal Study. Developmental Psychology, 1998 ; 34 : 480-90.

- 5) Isabella, R. A. Origins of Attachment: Maternal Interactive Behavior across the First Year. *Child Development*, 1993 ; 64 : 605-621.
- 6) Pederson, D. R. Moran, G. Expressions of the Attachment Relationship outside of the Strange Situation. *Child Development*, 1996 ; 67 : 915-927.
- 7) Cassidy, J. & Berlin, L. J. The Insecure/Ambivalent Pattern of Attachment: Theory and Research. *Child Development*, 1994 ; 65 : 971-991.
- 8) Barnett, D. Ganiban, J. Cicchetti, D. Maltreatment, Negative Expressivity, and the Development of Type D Attachments from 12 to 24 Months of Age. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 64. Atypical Attachment in Infancy and Early Childhood Among Children at Developmental Risk, 1999 : 97-118
- 9) Seifer, R. Schiller, M. The Role of Parenting Sensitivity, Infant Temperament, and Dyadic Interaction in Attachment Theory and Assessment. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 60. Caregiving, Cultural, and Cognitive Perspectives on Secure-Base Behavior and Working Models: New Growing Points of Attachment Theory and Research, 1995 : 146-174.
- 10) Bowlby, J. Attachment and loss. Vol 2. Separation, anxiety, and anger. New York Basic Books, 1973.
- 11) Eisenberg, N. Cumberland, A. Spinrad, T. L. Parental Socialization of Emotion. *Psychological Inquiry*, 1998 ; 9 : 241-273.

第2節 医学的視点からみた気になる子ども

1. 気になる子ども

健診や日常診療において「気になる子ども」としては、身体的な発育や栄養の問題、疾病のある子ども、また精神運動発達に遅れのある子ども、行動面での問題のある子どもがあげられる。発育や栄養の問題としては、特に肥満とやせ・低身長が、疾病の有無のみでなく、生活習慣すなわち養育の問題との関連で注目される。やせや低身長では愛情遮断症候群などの精神的・情緒的な問題がある場合があり、虐待も見逃してはならない。肥満の場合も養育態度に問題がある場合も少なくなく、家族間の問題が子どもに対する過保護などの形で現れる場合もある。

発達の遅れの中で言葉の遅れをきたすものとしては、頻度の高い順に発達性言語障害、精神遅滞、広汎性発達障害（自閉性障害を含む）、聴力障害、環境の問題があげられる。聴力障害でも多動傾向がみられたり一見自閉的にみえる場合があり、言葉の遅れがみられた場合にはまず聴力障害を否定する必要がある。行動面の問題としては、特に幼児期以降には落ち着きがない、みんなと遊べない、わがままである、おとなしすぎる、乱暴である、反抗的である、などの訴えがみられることが多い。その中には発達障害も含まれるが、多くは病的なものではなく、養育者の育児姿勢や子どもの性格や気質などからくることが多い。

一方、診察する側からみて気になる行動としては、乳児期では抱きにくい、生活のリズムが作りにくい、表情が乏しい、人見知りや後追いをしない、イナイナイバーをしても喜ばないなどがあり、幼児期以降では相手への関心が乏しい、視線が合いにくい、コミュニケーションがとりにくい、こだわりがある、落ち着きがない、気が散りやすい、むだな動きが多い、手先が不器用、協調運動が苦手、指示の理解ができないなどがあげられるであろう。これらの行動を示す子どもの中には発達障害児も含まれ、それらを早期に発見し適切な支援につなげるこ

が重要である。

2. 発達障害

発達障害の中でも**注意欠陥多動性障害（AD/HD）**や**高機能広汎性発達障害（HFPDD）**は集団に入って初めて気づかれることも多く、年少児では判断が困難な場合も少なくないが、知的な遅れを伴う**広汎性発達障害（PDD）**や中～重度の**精神発達遅滞（MR）**の場合には、言葉の遅れや運動発達の遅れをきっかけに比較的早期の発見が可能である。運動発達の遅れがない場合には、早期に病院を受診するよりも健診の場や集団の中で「気になる」行動で気づかれることが多いと考えられる。ただ、最近では、発達障害に対する関心の高まりから、かなり早期から養育者が子どもの発達障害を心配する場合も増えており、育てにくさ、コミュニケーションのとりにくさなど養育者の感じる違和感がPDDの早期発見につながることも多い。

広汎性発達障害（pervasive developmental disorder：PDD）は、①社会的相互関係の障害、②コミュニケーションの障害、③想像力の障害の3つの特徴を持ち、いずれも典型的にあてはまるものを自閉性障害（自閉症）と呼ぶ。①としては、視線が合いにくい、人見知りや後追いをしない、名前を呼んでも無視する、指さしをしない、一人遊びが多く集団遊びが出来ない、共感性に乏しい、などの症状がみられる。②では、言葉の遅れ、言葉は出ても会話にならない、おうむ返し、自分の興味のあることを一方的に話す、ものまねをしない、ごっこ遊びをしない、冗談が通じない、などがみられる。③では、常同的で単純な反復動作、限られたものへの強い興味、周囲からみて意味のない儀式や習慣にこだわる、融通がきかないなどがある。その他の症状としては、協調運動の障害、音や臭いなどへの過敏、極端な偏食、睡眠障害などもみられる。

PDDではいったん硬直化した行動パターンが身につけてしまうとそれを変えることが困難になるため、不適切な行動を身につける機会を少なくし、将来の社会的困難を軽減するために、早期からの介入が大切であり、早期に発見し適切な療育や治療を行っていくことが求められる。

注意欠陥多動性障害（attention-deficit/hyper activity disorder：AD/HD）は不注意、多動、衝動性を特徴とし、アメリカ精神医学会による診断基準DSM-IVでは多動性－衝動性優勢型、不注意優勢型、混合型という3つのサブタイプに分類され、必ずしも多動性が目立たなくてもAD/HDと診断できる。発達の水準にふさわしくない程度で不適応的な、不注意、多動性、衝動性の症状のいくつかは7歳以前からみられ、2つ以上の状況において少なくとも6か月以上持続している場合に診断される。不注意としては注意の持続が困難、不注意なミスや忘れ物が多い、気が散りやすいなどがあり、多動性としては落ち着きがない、じっとしていない、教室で離席してしまう、しゃべりすぎるなどが、衝動性としては順番が待てない、他人を邪魔するなどの症状がみられる。

日常生活においては、そのかわりにくさに伴う環境的な悪循環がその症状の増強・促進因子になると考えられ、社会的には、AD/HD本来の症状よりもむしろ、集団で行動できないなどの社会的行動の問題や対人関係の問題、精神・情緒的な面が問題となる。この悪循環を断ち切ることが二次的な合併症の予防や改善、子どもの生活の向上につながることを、養育者や

周囲の人が理解することが大切である¹⁾。

また、被虐待児の場合、自閉症やAD/HDに類似した症状を示すことがあり、健診や一般臨床の場では、十分な問診なしに症状だけで鑑別することは困難である。

3. 低出生体重児

ハイリスク児と呼ばれる出生体重が1,500 g未満の極低出生体重児、1,000 g未満の超低出生体重児の場合、過敏性が強くなかなか泣き止まない、睡眠のリズムが作りにくい、そりやすく抱きにくい、うまく哺乳ができない、離乳食が進まない、風邪を引きやすく重症化しやすい、など育児に手がかかる場合が多く、養育者が「育てにくい」と感じてしまう場合も少なくない。順調に育っている場合でも、身体発育や発達を同年代の子どもと比較して劣っているように感じてしまうこともあり、育児に不安をきたしやすい。また合併症のための配慮が必要な場合もあり、成熟児に比べ養育者への支援がより大切となる。また、ハイリスク児では軽度～境界域のMR、AD/HDや学習障害(LD)が成熟児と比べて多く見られる、という報告が多く、「気になる」「育てにくい」子どもが多い傾向にあり、長期的に見ても十分なケアが必要である。

4. 「気になる子ども」の子育てと支援

発達障害児の場合、育てにくい、懸命に養育をしてもうまくいかない、と感じる養育者も多く、子どもも日々の生活の中での生活のしにくさ、達成感のなさなどを感じることもあり、親子の間に葛藤が生じ、適切な関係が築けない場合がある。特に軽度発達障害の場合には、周囲から愛情が足りない、甘やかしている、しつけがなっていないなどと誤解され、非難の対象になることもめずらしくなく、発達障害特有の集団不適応が親子の問題に責任転嫁されると、親子の関係がより不適切なものになりがちである。また、遺伝的背景として、養育者自身が軽度の知的障害やPDDスペクトラムの場合もあり、これらの親子に対して適切なサポートがなされない場合には、虐待へと進むこともありうる²⁾。

障害のある子どもが虐待を受ける頻度は、障害のない子どもの4～10倍にのぼり、身体障害よりも知的障害、特に情緒障害や行動障害を持つ子どもの遭遇率が最も高いという調査結果³⁾があり、特に知的障害をとまわらないPDDの場合リスクが高いという報告⁴⁾もある。発達障害は虐待のハイリスクであり、特にPDDの場合、養育者にもその障害が理解されず、虐待に陥りやすい深刻な現状を示しているといえよう。

また、低出生体重児は虐待のハイリスク群と考えられているが、その理由として、早産で小さく生んだことに対する自責の念や喪失感が心的外傷になること、新生児期の長期間の母子分離により愛着形成が障害されること、退院後の育児負担や不安要因が継続すること、などがあげられる。低出生体重児は刺激や働きかけに対する反応が少なく見えるため不安を増長したり、発達障害をきたす頻度が高い傾向にあることもある。また、低出生体重児を出産するに至った社会的背景が虐待の要因と重なることもあげられる⁵⁾。

これらのハイリスクの子どもを持つ養育者に対しては、早期から適切な支援が必要である。

低出生体重児に対しては、早期から NICU 退院後のフォローアップや地域の保健所、保健センターの保健師などの援助を受けている場合が多いが、なるべく時間をとって親の話に耳を傾け、いつでも不安に関して相談できる雰囲気を作ることが求められる。発達障害が疑われる子どもに関しても、健診や日常診療などでなるべくきめ細かに子どもの様子を観察し、「気になる子」をもらさずに拾い上げる努力をする。また養育者に対し、子どもの特性の理解や具体的ななかかわり方の指導とともに養育者への肯定的な心理的支持を行うよう支援する。養育者の孤立感や不安感が軽減され、子どもに対する理解が促され、愛着形成の促進や不安の軽減がすすむことにより、養育者と子どもの相互の関係が改善し、養育者の自己評価を向上させることができる。発達障害は生得的な特性によるものであるが、子どもの発達上の特性を早期に理解し適切な環境を整えることにより、認知機能の向上や行動面の問題の軽減が期待できる。そのためには、医療と保健、幼稚園・保育園や学校など、子どもをとりまく支援者の連携が大切である。

5. 「かかわり指標」の活用

乳児健診、1歳半健診、3歳児健診などの事後措置として経過観察を行う過程において、また園での巡回相談などにおいて、「かかわり指標」を活用することができる。実施するにあたっては、以下の点に注意する必要がある。

「かかわり指標」は数分間で実施でき、簡便で客観的な評価が得られる有用なツールであるが、幼児の場合、特に年齢が低いほど、実施時の子どもの状態に結果が影響される可能性がある。また、新規課題の方が明確な反応が得やすいため、課題実施の前には積み木など課題に使用する道具では遊ばせない、などの配慮も必要である。

すすくすくコホート三重(26頁参照)では18か月児167例の行動観察を行い、その中で「かかわり指標」を実施した。その結果、指標を実施できた成熟児155例において、社会的参照の有無、注意集中の程度などは、「かかわり指標」の、特に子どもの<共感性>、<運動制御>の評定との関連がある傾向がみられた。しかし、行動観察全体から医師が受けた印象と、「かかわり指標」の部分のみでの子どもの印象とでは、異なる印象を受けた子どもが散見された。これは、対象児が18か月と幼少で観察中の状態変化もあるが、「かかわり指標」はあくまで「養育者と子どもとの相互関係」を見ており、養育者のかかわり方により子どもの反応が引き出され、相互に反応を引き出し合っているためと考えられる。

文 献

- 1) 宮島 祐. 医師のための発達障害児・者診断治療ガイド. 2006: 110-114.
- 2) 古荘純一. 医師のための発達障害児・者診断治療ガイド. 2006: 147-156.
- 3) 細川 徹. 平成13年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書. 2002: 382-390.
- 4) 杉山登志郎. そだちの科学2. 2004: 2-9.
- 5) 三科 潤. 河野由美編著. 厚生労働科学研究「周産期ネットワーク: フォローアップ研究」班著: ハイリスク児のフォローアップマニュアル 小さく生まれた子どもたちへの支援. 2007.

第3節 「かかわり指標」活用の意義と特徴

「かかわり指標」は、子どものかかわりの特徴を、社会能力の基盤として世界でもっとも広く活用されている「自己表現 (assertion)」「自己制御 (self-control)」「協調 (cooperation)」の枠組みに基づき、容易に評価することを目的としている。世界各国でさまざまな指標が開発されつつあるものの、社会能力の諸側面を、高い精度で容易に測定する方法は必ずしも十分ではない。本指標は、国際比較が可能な形でかかわりの諸側面を評価し、日本の子どもで妥当性が確認された評価指標である。実践用（11項目）と研究用（81項目）があり、本書では実践用を紹介する^{註1)}。

本指標を用いることで、子どものかかわりの特徴や社会能力の発達、およびそれに影響を与える養育者のかかわりの特徴を簡単に把握することができる。また実践場面では、気になる子どもや育児環境上の課題を早期に発見し、支援に結び付けることができるという意味できわめて意義深い。

本指標における子どもの社会能力とは、他者を理解し円滑に付き合う能力とする。本指標は、他者に配慮し他者とかかわる技術の発達プロセスを把握できる「子どもの社会能力評価」の一つとして位置付けられる。

本指標の特徴としては、下記の6点があげられる。

1. 汎用性が高い

本指標の実践場面への適用の強みとして、「日常場面で活用できること（生態学的な妥当性）」があげられる。すなわち、子育て支援場面や家庭訪問等の日常的な場面設定において、短時間（5分程度）で評価できること、また簡単な評価者トレーニングで実施できる点が特徴である。

2. 科学的な根拠がある（信頼性と妥当性が明示されている）

本指標は、広く国際的に活用されている評価指標との関連領域の基準関連妥当性が検証されている。また、広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害等、発達障害や気になる子どもと育児環境に関する判別妥当性、検査者間信頼性が確認されている。

3. 国際比較可能な領域別に数値で評価する

世界でもっとも広く使用されている社会能力の構成要素の枠組みを採用しており、既存研究における子どもの社会能力の発達や養育環境評価の領域別の評価と比較ができる。領域別に数値で評価して発達プロセスを追うことができ、発達パターン推移分析や気になるパターンの把握が容易である。

註1) 研究用についての詳細は、編者 (anmet@md.tsukuba.ac.jp) までご一報ください。

4. 子ども側面と養育者側面を独立して評価するとともに、相互の関連性を把握できる

子ども側面の評価として子どもの社会能力の評価を行うと同時に、養育者側面を独立して評価することができる。したがって子どもと養育者の相互作用を評価する、あるいは養育者変数を調整変数として投入するなど、目的に応じた柔軟な活用ができる。

5. 実践の場で専門職が容易に活用できる

子育て・子育て支援において専門職のアセスメントツールの一つとして活用できる。相互作用の質の評価、気になる子どもと養育者の発見システム等への活用が期待される。

6. 子どものかかわりの特徴を測定し、支援に直接結びつけられる

もっとも大きな意義として、本指標の結果を実践場面で支援に直接結びつけられる点がある。子どもの社会能力の実態、あるいは養育者のかかわりの特徴に基づき、将来予測に基づいた根拠に基づく支援の展開が可能となる。

第4節 理論背景

子どもの社会能力の発達には、子どもの持って生まれた「**個体要因**」と、養育者をはじめとする「**家族関係、仲間関係の要因**」、および「**社会、文化的な環境要因**」が複雑にからみあって影響している。たとえば発達初期においては、子どもの個体要因としての気質と、もっとも身近な社会環境としての養育者のかかわりが互いに作用しあう中で、子どもと保護者の間にアタッチメント関係が形成される。養育者との安定した**アタッチメント**は、のちの仲間関係など対人関係のあり方を決めたり、コミュニケーションに必要な社会能力を育むと考えられている。

初期の養育環境が子どもの発達に重要であるという観点から、養育者のかかわりを中心とする社会的な環境の質を測定する指標が数多く開発されてきた。代表的なものとして**養育環境評価 HOME** (Home Observation for Measurement of the Environment)¹⁾ や**育児環境指標 ICCE** (Index of Child Care Environment)²⁾ があげられる。HOME および ICCE は、子どもの日常的な物理的、社会的な養育環境の質を観察や質問紙により測定するもので、養育者の情緒的・言語的な応答性、子どもの行動の受容など、養育者の子どもに対する接し方を測ることができる。HOME は、米国における国立子どもの健康と発達研究所 (NICHD) 研究³⁾⁴⁾をはじめ国内外の研究で幅広く用いられている。ICCE は日本の保育コホート研究^{5)~10)} で利用されている。また、養育者や教師などおとなと子どもの教示場面における相互作用を観察し、おとな側の教示のうまさ、かかわりの敏感さを4段階で評定する MLERS (Mediated Learning Experience Rating Scale)¹¹⁾ という指標もある。

そこで本研究では、100 か国以上で活用されている養育環境評価 HOME の構成枠組みと比較が可能なよう<主体性発達への配慮><応答性発達への配慮><共感性発達への配慮><認知発達への配慮><社会情緒的発達への配慮>を養育者側面の下位領域として設定した。

子どもの社会性は、その内容が幅広くさまざまな要素を含むため、日本では子育て支援の実践場面で、子どもの社会能力を総合的かつ客観的に評価できる指標はほとんど見当たらないのが現状である。たとえば NICHD 研究で使用されている**社会スキル評価システム SSRS** (Social Skills Rating Systems)¹²⁾ は、子どもの社会的な行動を測定する指標であるが、子どもの日常的な様子を見ている保護者もしくは教師、または本人による評定であり、評価者が限定される上、客観性が損なわれるおそれもある。

社会能力の構造については研究者により表現が異なる。Gresham ら¹¹⁾ は、上記 SSRS で協調性 cooperation、自己制御 self-control、自己表現 assertion の3因子をあげているが、Caldarella ら¹³⁾ は、仲間関係 peer relations、従順さ compliance、自己管理 self-management、自己表現 assertion、学業の成功 academic の5因子を、Elksnin ら¹⁴⁾ は人間関係 interpersonal、学業の成功 teacher-pleasing、自己制御コミュニケーション

self related communication、自己表現 assertiveness、Kolb ら¹⁵⁾ は仲間関係 peer & group interaction、問題解決・意思決定 problem solving/decision making、自己管理 self management、コミュニケーション communication、自己表現 assertion の5因子をあげている。

しかしいずれの分類においても、**他者への共感 / 協調性、自己制御機能、意思の明示 / 自己主張**を軸に置いている点で共通しており、この3因子にまとめられると考えられる。この3因子構造は日本における大規模な研究データにより再現性が確認されており¹⁶⁾、本研究においてもこれに基づいて子どもの社会能力の枠組みを設定した。すなわち、共感 / 協調性として<応答性><共感性>、自己制御機能として<運動制御><感情制御>、意思の明示 / 自己主張として<主体性>を下位領域として設定した。

一方で、社会能力とは、環境との相互作用の中で発揮されるものであり¹⁷⁾、子どもの社会能力を評価するためには、その子どものもっとも日常的な環境（発達初期には養育者）でのやりとりの中で評価される必要がある¹⁸⁾。

ワシントン大学において開発された **NCAST Teaching Scale**（以下、NCATS）¹⁹⁾ は、評定者が課題場面における養育者と子ども（0～3歳）の相互作用を約5分間観察し、行動の生起をチェックするスケールである。観察された養育者の行動から、1) 子どものそぶりに対する敏感性 sensitivity to cues、2) 子どものいらだちに対する反応 Response to child's distress、3) 社会情緒的発達の育成 Social-emotional growth fostering、4) 認知能力の育成 Cognitive growth fostering、の4因子が、子どもの行動からは、1) 明確な反応 Clarity of cues、2) 養育者に対する反応 responsiveness to parent、の2因子を測定する。養育者の子どもに対するかかわりの質、および子どもの行動について短時間で構造的かつ客観的に把握できる点で優れた指標である。しかし、子どもの社会能力を、養育者との関係性の中で総合的に抽出できるものではない。また米国と日本の文化差があり、日本では評価しにくい行動が含まれている。

そこでわれわれは、乳児期から児童期におよぶ子どもの社会能力について、子どもの身近な日常場面で、総合的かつ客観的に評価する「**かかわり指標**」を開発した。子どもの社会能力の評価指標とするとともに、実践の場で専門職が気になる子どもとその養育者の早期発見、早期支援を行うツールとして活用できるものである。

文 献

- 1) Caldwell, B.M. Bradley, R.H. Home Observation for Measurement of the Environment. Little Rock: Center for Research on Teaching and Learning, University of Arkansas. 1974 : 1-164.
- 2) Anne T. Segal U. Center-based evening child care : Implications for young children's development. Early Childhood Education Journal 2003 ; 30 (3) : 137-143.
- 3) NICHD Early Child Care Research Network. Nonmaternal care and family factors in early development: An overview of the NICHD study of early child care. Journal of Applied Developmental Psychology 2001 : 22 (5) : 457-492.

- 4) NICHD Early Child Care Research Network. Relations between family predictors and child outcomes: Are they weaker for children in child care? *Developmental Psychology* 1998 ; 34 (5) : 1119-1128.
- 5) Anme T. Bridge between Mind and Education : Evidence from Longitudinal Research on Child care environment and Child development, Asia-Pacific conference on Mind, Brain and Education 2008 ; 1 : 14-18.
- 6) Anme T, The cohort study as the mission-critical method to clarify the dynamic nature of social competence development in children : trajectories and implications. *Japan Children's Study*, 2009.
- 7) Anme T, Segal U. Implications for the development of children placed in 11+ hours of center-based care. *Child: care, health and development* 2004 ; 30 (4) : 345-352.
- 8) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援 - よい長時間保育の見わけかた -. 東京: 勁草書房, 2004 ; 1-144.
- 9) 安梅勅江, 田中裕, 酒井初恵他. 子どもの発達への子育て環境の影響に関する5年間追跡研究. *こども環境学研究* 2005 ; 1 (1) : 1-6.
- 10) 安梅勅江. 根拠に基づく子育て・子育てエンパワメント-子育て環境評価と虐待予防-. 東京: 日本小児医事出版社, 2009
- 11) Burchinal MR, Campbell FA, Bryant DM, Warsik BH, Ramey CT. Early Intervention and Mediating Process in Cognitive Performance of Children of Low-Income African American Families. *Child Development* 1997 ; 68 (5) : 935-954.
- 12) Gresham FM, Elliot SN. *Social skills rating system-Secondary*. Circle Pines, MN: American Guidance Service. 1990 : 1-223.
- 13) Caldarella P, Merrell KW. Common dimensions of social skills of children and adolescents: A taxonomy of positive behaviors. *School Psychology Review*, 1997 ; 26 : 264-278.
- 14) Elkskin LK, Elikskin N. Teaching social skills to students with learning and behavior problems. *Intervention in School & Clinic*, 1998 ; 33 (3) : 131-141.
- 15) Kolb SM, Hanley-Maxwell C. Critical social skills for adolescents with high incidence disabilities: parental perspectives. *Exceptional Children*, 2003 ; 69 (2) : 163.
- 16) 高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 安梅勅江. 就学前児の社会的スキル-コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討-. *教育心理学研究* 2008 ; 56 (1) : 81-92
- 17) Lidz CS. *Practitioner's guide to dynamic assessment*. New York: Guilford Press. 1991 : 1-221.
- 18) Feuerstein R, Rand Y, Hoffman MB. *The dynamic assessment of retarded performers : The Learning Potential Assessment Device: Theory, instruments and techniques*. Baltimore: University Park Press. 1979 : 1-165
- 19) Barnerd K. *Nursing Child Assessment Satellite Training manual*. 1994

第2章

「かかわり指標」の内容

第1節 枠組み

本指標は、子ども（0～8歳）と養育者を対象とする。子どもの年齢相応より多少難しい課題について、養育者がかかわることにより子どもが達成に向けて取り組む場面を設定し、日常的で自然体に近い形での相互作用を評価する。評価は下記の「子ども側面」と「養育者側面」の両側面から10領域について、さらに総合的な関係性についてかかわりの状態を把握する。

●●●子ども側面

- ①主体性（Autonomy）：自分から養育者に働きかける
- ②応答性（Responsiveness）：養育者の動きに明確に反応する
- ③共感性（Empathy）：養育者の行動や状況に即した行動をする
- ④運動制御（Motor self regulation）：動きが課題に向けられ、気になる動きがない
- ⑤感情制御（Emotional self regulation）：自分で感情の制御ができる

●●●養育者側面

- ⑥主体性発達への配慮（Respect for autonomy）：子どもの主体性を促す働きかけをする
- ⑦応答性発達への配慮（Respect for responsiveness）：
子どもの応答性を促す働きかけをする
- ⑧共感性発達への配慮（Respect for empathy）：子どもの共感性を促す働きかけをする
- ⑨認知発達への配慮（Respect for cognitive development）：
子どもの認知発達を促す働きかけをする
- ⑩社会情緒的発達への配慮（Respect for social-emotional development）：
子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする

●●●関係性総合評価

子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。

第2節 評価項目

具体的な評価項目は、表1のとおりである（Appendix 1、2参照）。

表1
かかわり指標

記入日 年 月 日：氏名 . 男・女 歳 月：記入者

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったく あてはまらない 1.	あまり あてはまらない 2.	どちらとも いえない 3.	やや あてはまる 4.	よく あてはまる 5.
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。					
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。					
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。					
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。					
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。					

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。					
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。					
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。					
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。					
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒の発達を促す働きかけをする。					
◎ 関係性総合評価 子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。					

第3章

実施方法

第1節 実施方法

以下の手順で実施する。なお英語版は Appendix 3 を参照のこと。

1. 対象

子ども（0～8歳）と養育者（あるいは専門職、研究者その他も可能）

2. 設定

日常的な場面において、子どもの年齢相応より多少難しい課題を設け、養育者がかかわることにより子どもが達成に向けて取り組む場面を設定することが望ましい。ただし、家庭訪問や健康診断、保育実践などの自然な子どもと養育者（専門職）のかかわり場面を設定することも可能である。

3. 観察時間

約1～5分

4. 評価方法

評価基準に基づき、領域ごとに5段階（1. まったくあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらともいえない 4. ややあてはまる 5. よくあてはまる）で評定する。

最後に、「関係性総合評価」として、子どもと養育者の関係性の「調和の良さ」について、総合的な評価を領域と同様に5段階で評定する。「調和の良さ」とは、「子どもと養育者の視線や感情の交流、物のやりとりなどのタイミングが調和的である。穏やかな雰囲気のもとで、自然なやりとりが見られる」ことである。

評定については、1～5をそのまま得点とし、加算して総合得点とする。

5. 実施課題の例

子どもと養育者のかかわりの起こる課題であれば、基本的にどのようなものを用いてもよい。ここでは例として、年齢相応のかかわりを容易に引き出すことのできる課題をあげる。

- (1) 0歳児 養育者の顔を見る、積み木をたたく、
音のする方向を見るなど。

(2) 1～2歳児 積み木をやや難しい高さまで高く積むなど。

(3) 3歳児 積み木の橋の上にやや難しい高さまで高く積むなど。

積み木の箱を机に置き、課題の完成見本図(図1)を養育者に見せ、次の教示をする。

教示:「お子さんに積み木でこの見本と同じものを作ってもらいます。お子さんひとりでは難しいと思いますので、お母さん(お父さんなど)がふだんどおりのやりかたで教えてあげてください。」

(4) 4～8歳児 スティックによるやりとりゲームなど。

スティッキーを、ゲームが始められる状態(図2)に準備して机に置き、次の教示をする。

教示:「これは、お子さんとお母さん(お父さんなど)が交代で、棒を一本ずつ抜いていくゲームです。スティックの束をできるだけ倒さないで、長い間続けられるようにお子さんとふたりで協力してください。抜きやすそうなスティックを、お子さんに教えてあげてもけっこうです。」

「ここでは、続けて同じ色を抜かないルールにしてください。たとえば、お母さんが赤色を抜いたら、次はお子さんが赤以外の色を抜くようにします。」
 「では、はじめはじゃんけんをして、勝ったほうがさいころを振って、出た色から抜いて下さい。」

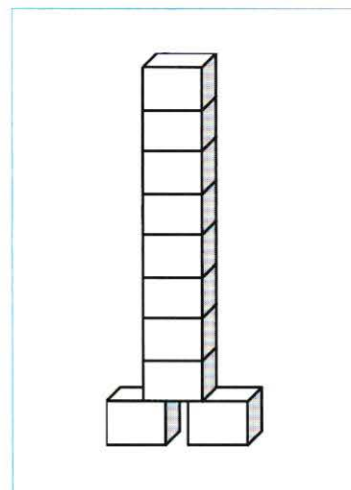


図1 課題の完成見本図



図2 スティック

第2節 評価基準

各々の領域の評価基準は次のとおりである。

かかわり指標の評価法

<子ども側面>

1. 主体性

自分から養育者に働きかける。

まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちらとも いえない	やや あてはまる	よく あてはまる
1.	2.	3.	4.	5.

養育者に向かって発声する、微笑む、笑う、自発的に目を合わせようとする。

また養育者に対する自己主張や、養育者からの応答を主体的に引き出そうとするなど。

2. 応答性

養育者の動きに明確に反応する。

1.	2.	3.	4.	5.
----	----	----	----	----

養育者に対して明らかな反応を示したり、養育者が目を合わせた時に見返したりする。

また養育者の発話、態度や接触、表情の変化等の後に、発声するなど。

3. 共感性

養育者の行動や状況に即した行動をする。

1.	2.	3.	4.	5.
----	----	----	----	----

養育者に視線を向けて、要求ではなく共感を求めてものを見せる、渡す、指さしたり、参照視したりする。

また養育者の発話、態度や接触、表情の変化に対応した発声や微笑み、動きがあるなど。

4. 運動制御

不自然な動きや気になる動きがない。

1.	2.	3.	4.	5.
----	----	----	----	----

養育者や道具に対して目を見開き注意を向ける、課題に反応して姿勢や動きが変化する、手を動かす。

また不自然な動きやむだな動きがないなど。

5. 感情制御

自分で感情の制御ができる。

1.	2.	3.	4.	5.
----	----	----	----	----

自分で気持ちの切り替えをして立ち直ったり、養育者がなだめて立ち直ったりする。

また養育者に助けやなくさめを求め、状況の変化に過敏な反応をしないなど。

＜養育者側面＞

6. 主体性発達への配慮

1. 2. 3. 4. 5.

子どもの主体性を促す動きかけをする。

子どもが自ら意思決定してかかわるよう、子どもにゆったりと道具をさわらせたり、見守ったりする。

また子どもの主体的なかかわりを尊重し、動きが見られたら説明していても黙る、子どもに無理にさせようとしない、批判的にしない、子どものいらだちには中断して対応する、など状況に応じて配慮した行動をとるなど。

7. 応答性発達への配慮

1. 2. 3. 4. 5.

子どもの応答性を促す動きかけをする。

子どもが応答しやすいよう、安全で動きやすい姿勢をとり、手を動かせるように周囲の状況を整える。

また目の合う位置で子どもの注意を向けるとともに、うまくいかない時には位置を変えるなど、つねに敏感に子どもの動きに配慮するなど。

8. 共感性発達への配慮

1. 2. 3. 4. 5.

子どもの共感性を促す動きかけをする。

子どもをほめる、うなずく、ほほえむ、なだめる、やさしい言葉かけなど、共感性を促す行動をとる。

また子どものいらだちに対し、うまく子どもを受け止める形で対応するなど。

9. 認知発達への配慮

1. 2. 3. 4. 5.

子どもの認知発達を促す動きかけをする。

子どもが集中できる環境を整え、言葉と動作などさまざまな表現を用いて、わかりやすく子どもに説明する。

また子どもが注意を向けてからかかわり、子どもの発達に応じたフィードバックや、できたことをしっかり伝えるなど。

10. 社会情緒発達への配慮

1. 2. 3. 4. 5.

子どもの社会情緒的発達を促す動きかけをする。

子どもと向かい合い愛情のこもった態度で対応し、否定的な言葉や強い口調、乱暴な態度をとらない。

また子どもに建設的な勇気づける言葉をかけ、他者に対して子どもの悪口を言わないなど。

◎ 関係性総合評価

1. 2. 3. 4. 5.

子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。

「調和の良さ」とは、「子どもと養育者の視線や感情の交流、物のやりとりなどのタイミングが調和的である。穏やかな雰囲気のもとで、自然なやりとりが見られる。」こととする。

子ども、養育者それぞれの細かな行動は各領域の項目で評価し、両者のやりとりの質や全体的に感じる印象を総合評価する。

第4章

科学的な根拠

第1節 発達心理学的な妥当性

1. はじめに

子どもの社会能力の発達には、子どもの生得的な個体要因と、養育者をはじめとする家族関係、仲間関係の要因、および社会文化的環境要因との複雑な相互作用のもとにおいて営まれる。とりわけ乳幼児期においては、養育者とのかかわりの質が重要な要因となるであろう。そこで本研究では、4か月・9か月・18か月・30か月における対象児と養育者との相互作用を縦断的に観察し、対象児の社会能力の発達過程を構造的に捉えることを目的とした。その際、本研究では、社会能力の指標として4か月・9か月時には「静止顔 (Still-Face) 実験」を、18か月・30か月時には「かかわり指標 (研究用)」¹⁾を用いることとした。

2. Still-Face 実験について

おとなが乳児と向かい合ったまま、表情、身体の動き、発声を止め、子どもに対する働きかけを中断する「Still-Face 実験」は、社会的相互作用の非随伴性に対する敏感さを発達初期において評価できる指標として広く用いられてきた^{2)~8)}。

一般に、Still-Face 場面に置かれた子どもは、肯定的な感情表出が減少し、否定的な感情表出が多くなされるようになる。また、指しゃぶりをして自己沈静を試みたり、視線をそらす行動が見られる一方で、相手を見ながら微笑んで注意を引こうとしたり、発声を行う場合もある^{2) 9)}。このことから、Still-Face 実験において観察される子どもの行動は、他者の感情表出に対する反応の敏感さ、ストレス状況における感情の自己制御機能の個人差を反映しており、それらはのちの社会能力の発達基盤として重要なものであると考えられる。

また先行研究では、Still-Face 場面の後におとなが随伴的な相互作用を再開させても、子どもの否定表情が持続する傾向 (carry-over effect) が報告されている^{2) 10)}。これは、Still-Face によって受けたストレスからの立ち直りにくさやおとなに慰撫してもらおうとする社会的期待を反映していると考えられ、Still-Face 場面と同様、対象児が各月齢において有する社会能力の指標として重要である。

3. 本研究の目的

本研究では、4か月および9か月時における対象児の Still-Face 実験 (母親が普段と同じ

ように子どもと遊ぶ日常 Natural Interaction (以下、NI) 場面と、子どもを見つめたまま表情と身体の動き、発声を止める無表情 Still-Face (以下、SF) 場面 (各2回からなる) で生じた行動と、同対象児の18か月・30か月時における「かかわり指標」各領域の得点との関連を調べることにより、社会能力の個人差を予測する変数と発達の軌跡を明らかにすることを目的とした。

養育者による Still-Face 実験での対象児の行動が、その後の養育者との日常的なやりとりの場面における行動特徴をもとにした評定と関連しているならば、実験室内における Still-Face 実験がのちの日常場面を予測し得ると考えられ、Still-Face 実験の予測的妥当性を示すことが可能になる。逆に、「かかわり指標」とは異なる評定者によりコーディングされた Still-Face 実験の行動指標との関連を示すことにより、かかわり指標の妥当性を担保することができる。

4. 方法

すくすくコホート^{註1)}に参加し同意を得た母子231組(男児117名、女児114名)を対象とした。

(1) Still-Face 実験 (4・9か月時)

手続き: ワンウェイミラーのついた実験室内で対象児が4か月および9か月の時に行動観察を行った。母親が普段と同じように子どもと遊ぶ「Natural Interaction (NI) 場面」と、子どもを見つめたまま表情と身体の動き、発声を止める「Still-Face (SF) 場面」より構成され、① NI1 場面 (30秒間) ② SF1 場面 (1分間) ③ NI2 場面 (30秒間) ④ SF2 場面 (30秒間) の順序で行った。

行動カテゴリー: デジタルビデオカメラによって撮影された映像記録をもとに、5秒1コマのワンゼロサンプリング法によって、子どもの行動のうち「感情表出(肯定感情/否定感情)」、「養育者への視線」、「発声」を記録した。なお、本研究で使用したデータは2名の評定者による一致率が算出され、高い信頼性が確認されている。

(2) かかわり指標 (18か月・30か月時)

日常的な場面において、子どもの年齢相応より多少難しい課題を設け、養育者がかかわることにより子どもが達成に向けて取り組む場面を設定した。評定者が両者の行動を観察し、各領域の項目の内容があてはまれば○、あてはまらなければ×を記入した。また、領域ごとに、全体の評価を5段階(1. よくあてはまる～5. まったくあてはまらない)で評定した。

18か月・30か月における手続き:

実験者は、養育者に積木の完成図を提示し、「お子さんに積み木でこの見本と同じものを作ってもらいたいと思います。お子さんひとりでは難しいと思われるので、お母さんがふだんどりのやりかたで教えてあげてください。」と教示した。観察時間は、約1～5分であった。

また、課題終了後、「では、次に移る前に、お子さんと一緒に積み木をお片づけしてください。」と教示し親子での片づけ場面を設定した。

5. 結果

4、9か月時における Still-Face 実験での各行動の生起割合から算出された合成変数を説明変数、18、30か月時におけるかかわり指標得点<感情制御>を基準変数としてパス解析を実施した。具体的には「養育者への視線」のNI1 場面とSF1 場面での減分 (NI1-SF1) を算出し、母親の Still-Face に対するストレス対処行動としての“視線回避”と定義した。さらに「否定表情表出」のNI1 場面とNI2 場面での増分 (NI2-NI1) を算出し、Still-Face 終了後もストレスから立ち直れず否定感情が持続する“否定的表情持続”の指標と操作的に定義した。

Amos7.0 を用いたパス解析の結果、9か月の“否定的表情持続”から18か月の感情制御リスク得点への標準化係数推定値が0.20で有意となり ($p=0.031$)、9か月の“視線回避”から18か月の感情制御リスク得点への標準化係数推定値は-0.16で有意傾向 ($p=0.099$) となった。一方で、4か月から9か月、または18か月から30か月への標準化係数推定値はいずれも有意ではなかった (図1)。

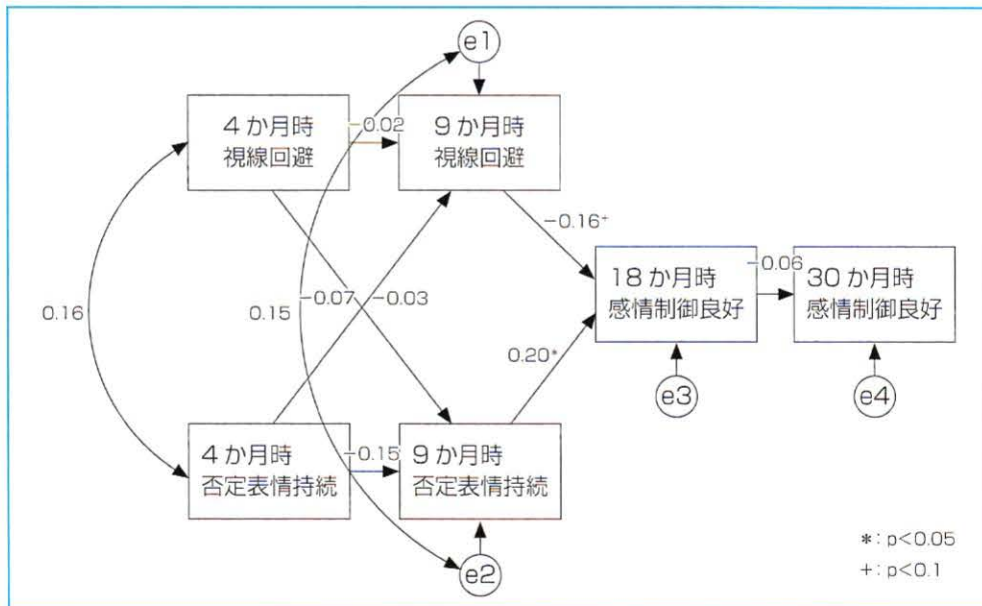


図1 4か月および9か月時の Still-Face 場面から得られた行動変数と18か月および30か月時におけるかかわり指標 (感情制御リスク) 得点のパス図 (数値は標準化係数および相関係数の推定値)

6. 考察

本研究の結果、Still-Face 実験における9か月時の感情制御を表す指標と、18か月時におけるかかわり指標<感情制御>領域の間に整合性のある発達の連続性が見出された。しかし、その連続性は30か月時には見られなくなった。

乳児期における親子の相互作用の質に関して、1歳代までは連続性が見られるものの、2歳以降になると一貫した関連が見られなくなるという研究結果は多くあげられている¹¹⁾。これは、幼児期以降になると子どもは仲間や親以外の大人との対人関係を幅広く持つようになり、家庭外のさまざまな環境から多様な影響を受けるようになるため、乳児期の親との相互作用によって形成された行動パターンが必ずしも維持されないことを意味している。本研究において0歳代の養育者によるStill-Face実験から得られた子どもの行動特徴が、30か月時の感情制御を予測し得なかったのはこのことが一因であると考えられる。

また子どもは18か月を過ぎると、言語能力の発達により「うれしい」「びっくりした」「こわい」「いやだ」「腹が立つ」というような自らの感情について話すための語彙が急速に伸びる¹²⁾。このことにより、自分の内的状態を言語的に処理することが可能となり、養育者に感情制御のサポートを求めることもできるようになる¹³⁾。このような感情制御方略の多様化が、18か月時から30か月時への連続性を消失させたとも考えられる。

今後は、保育形態やソーシャルサポートなど、子どもを取り巻く社会的環境要因や子どもの認知能力など諸側面の発達を変数に取り入れつつ、さらに縦断的観察を行うことで子どもの社会性の経年変化をより詳細に明らかにすることが可能となるであろう。

7. おわりに

本研究より、養育者によるStill-Face実験での対象児の行動が、その後の養育者との日常的なやりとりの場面における行動特徴を予測し得ることが明らかとなった。また、異なる時期に測定され、異なる評定者によってコーディングされたStill-Face実験の行動指標との関連を示すことにより、かかわり指標の妥当性が改めて確認された。

かかわり指標は、実践の場で専門職が気になる子どもと養育者の早期発見、早期支援ツールとして活用する社会実装を目的の一つとする。本指標は乳児期から児童期にかけて反復して使用することができるため、縦断的観察により子どもの社会性の経年変化を把握することが可能となる。本研究の結果をさらに発展させ、実験的研究により得られた発達心理学の知見と教育の実践の場のニーズを連携させる一助とすることが今後の課題である。

文 献

- 1) 安梅勅江, 矢藤優子, 篠原亮次, 杉澤悠圭. 「子どもの社会能力評価「かかわり指標」の妥当性と信頼性」. 日本保健福祉学会誌, 2007; 14, 23-31.
- 3) Gresham, F. M. Elliot, S. N. Social skills rating system-Secondary. Circle Pines, MN: American Guidance Service, 1990.
- 4) Ludemann, P. Nelson, C. Categorical representations of facial expressions by 7 month-old infants. *Developmental Psychology*, 1998; 24, 492-501.
- 5) Mayes, L.C. Carter, A. S. Egger, H. L. & Pajer, K. A. Reflections on stillness: Mothers' reactions to the still-face situation. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 1990; 30, 22-28.
- 6) Symons, L. Hains, S. Muir, D. Look at me: Five-month-old infants' sensitivity to very small deviations in eye-gaze during social interaction. *Infant Behavior and Development*, 1998; 21, 531-537.
- 7) Weinberg, M. K. Tronck, E. Z. Beyond the Face: An Empirical Study of Infant Affective Configurations of Facial, Vocal, Gestural, and Regulatory Behaviors *Child Development*, 1994; 65, 1503-1515.
- 8) Tronick, E. Z. Als, H. Adamson, L. Wise, S. Brazelton, T. B. The infant's response to entrapment between

- contradictory messages in face-to-face interaction. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 1978 : 17, 1-13.
- 9) Moore, G. A. Cohn, J. F. Campbell, S. B. Infant affective response to mother's still-face at 6 months differentially predict externalizing and internalizing behaviors at 18 months. *Developmental Psychology*, 2001 : 37, 706-714.
- 10) Fogel, A. Diamond, G. Langhorst, B. Demos, V. Affective and cognitive aspect of the 2-month-old's participation in face-to-face interaction with the mother. In E. Tronick (Ed.) , *Social interchange in infancy: Affect, cognition, and communication*. 1982 : 37-57. Baltimore: University Park Press.
- 11) Takahashi, K. (1990) . Are the key assumptions of the "Strange Situation" procedure universal? A view from Japanese research. *Human Development*, 33, 23-30.
- 12) Bretherton, L. Fritz, J., Zahn-Waxler, C., & Ridgeway, D. (1986) . Learning to talk about emotions: A functionalist perspective. *Child Development*, 57, 529-548.
- 13) Grolnick, W. S., Bridges, L. J., & Connell, J. P. (1996) . Emotion regulation in two-year-olds: Strategies and emotional expression in four contexts. *Child Development*, 67, 928-941.

註1) すくすくコホート：科学技術振興機構社会技術研究開発センター「脳科学と社会」計画型研究開発「日本における子どもの認知・行動発達に影響を与える要因の解明」の発達コホート。

Japan Children's Study Group

研究責任者：

小泉 英明 (株日立製作所 基礎研究所)

山縣 然太郎 (山梨大学大学院 医学工学総合研究部)

研究参加者：

安治 陽子、塩谷 裕香、岩崎 瑞枝、久津木 文、黒木 美紗、市川 奈穂、守田 知代、小池 はるか、森戸 勇介、成 順月、石田 開、谷中 久和、田中 大介、難波 久美子、福士 珠美、豊田 浩士、木村 志保子、澤田 晃子 (科学技術振興機構 社会技術研究開発センター)、Kevin Wong (Department of Anesthesia and Critical Care, Massachusetts General Hospital)、榎原 洋一 (お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター)、川口 英夫 (株日立製作所 基礎研究所)、松石 豊次郎 (久留米大学 医学部)、莊巖 舜哉 (京都光華女子大学大学院 人間関係学研究科)、富和 清隆、栗屋 智就、松澤 重行 (京都大学大学院 医学研究科)、板倉 昭二 (京都大学大学院 文学研究科)、岡田 眞子 (甲賀市 教育研究所)、駒田 美弘 (三重大学大学院 医学系研究科)、山本 初実、山川 紀子、盆野 元紀 (三重中央医療センター 臨床研究部)、桃井 真里子、塩川 宏郷、山形 崇倫 (自治医科大学 小児科学教室)、定藤 規弘、齋藤 大輔 (自然科学研究機構 生理学研究所)、内山 仁志 (松江総合医療専門学校)、前田 忠彦、尾崎 統 (情報・システム研究機構 統計数理研究所)、小椋 たみ子 (神戸大学大学院 人文学研究科)、池田 浩子 (静岡てんかん・神経医療センター)、根ヶ山 光一 (早稲田大学 人間科学部)、中川 佳弥子 (大阪大学 工学研究科)、森本 兼曩 (大阪大学大学院 医学系研究科)、安梅 勅江 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科)、小林 勝年 (鳥取大学 生涯教育総合センター)、小枝 達也、田丸 敏高、関 あゆみ、寺川 志奈子、竹内 亜理子 (鳥取大学 地域学部)、小西 行郎 (東京女子医科大学 乳児行動発達学講座)、佐倉 統 (東京大学大学院 情報学環)、河合 優年 (武庫川女子大学 教育研究所)、江上 園子 (北海道教育大学)、星野 崇宏 (名古屋大学大学院 経済学研究科)、矢藤 優子 (立命館大学 文学部)

第2節 信頼性と基準関連妥当性

1. はじめに

子どもの成長発達に影響する要因を明らかにする方法論の開発は、世界各国で着実に蓄積されつつある¹⁾。特に、子どもの社会能力は、学童期、思春期における衝動行動や社会不適応等の増加にともない注目され、他者を理解し、円滑に付き合う能力として、重要視されている²⁾。

本節では、子どもの社会能力の評価指標である「かかわり指標」の信頼性と NCAST Teaching Scale (NCATS、14 頁参照) との基準関連妥当性を検討した。

NCATS は、養育者のかかわりを主に子どもの応答性ととも評価し、信頼性、妥当性が確認されているスケールであり³⁾、短時間で構造的、客観的に把握できる。

2. 目的

「かかわり指標」の信頼性、妥当性を評価するため、かかわり指標の内的一貫性、また、NCATS との基準関連妥当性を検討した。

3. 対象と方法

対象は、すくすくコホート(27 頁参照)に参加した 18 か月児 231 名とその養育者である。分析対象は属性欠損のある者を除いた 211 名(男児 108 名、女児 103 名)である。

「かかわり指標」は、子ども側面 5 領域(1. 主体性、2. 応答性、3. 共感性、4. 運動制御、5. 感情制御)、養育者側面 5 領域(6. 主体性発達への配慮、7. 応答性発達への配慮、8. 共感性発達への配慮、9. 認知発達への配慮、10. 社会情緒的発達への配慮)、合計 10 項目、および関係性総合評価 1 項目の 11 項目で構成されている。

NCATS は、養育者 4 領域 50 項目、子ども 2 領域 23 項目、合計 72 項目である。

「かかわり指標」は各項目について 1. まったくあてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. よくあてはまるの 5 段階評価である。関係性総合評価は、子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いているかを評価しており、同様の 5 段階評価である。項目 1 から 5 までの得点を合計したものを「子ども領域得点」、項目 6 から 10 までの得点を合計したものを「養育者領域得点」、「子ども領域得点」と「養育者領域得点」を合計したものを「かかわり得点」とした。

NCATS は、子ども領域および養育者領域別に、各項目に該当したものを 1、非該当を 0 として子どもと養育者の全体得点を算出し、さらに子ども領域と養育者領域の得点を合計した得点を全体の NCATS 得点とした。

評価は、子どもと養育者のかかわりが見られる場面(ブロック遊び、かたづけ)の画像データを分析した。かかわり指標と NCATS との関連について、2 つのスケールを同対象、同場面に用いて評価した。

分析は、「かかわり指標」のクロンバック α 係数を算出し、内的一貫性を検討した。また「か

かわり指標」の各領域、および NCATS の子ども領域、養育者領域、全体得点について相関係数を算出し、基準関連妥当性を検証した。

分析には、PC 版 SAS 統計パッケージ Ver. 9.1 を用いた。

4. 結果と考察

(1) 信頼性

「かわり指標」のクロンバック α 係数を表 1 に示した。クロンバックの α 係数は、かわり指標 0.87、子ども領域 0.87、養育者領域 0.82 であり、内的一貫性による高い信頼性が確認された。全国 18 か所の保育園児（2～6 歳）を対象とした研究用「かわり指標」を用いた調査においては、クロンバック α 係数は「かわり指標」全体で 0.94、各下位領域で 0.62～0.80 であり¹⁾、過去に実施した調査と比較して、同程度の信頼性がみられている。

表 1 かわり指標 内的一貫性

かわり指標	クロンバック α 係数
かわり指標	0.87
子ども領域	0.87
養育者領域	0.82

(2) 基準関連妥当性

「かわり指標」の各領域と NCATS との相関係数を表 2 に示した。相関係数は、関係性総合評価と NCATS 得点（相関係数：0.64、 $p < 0.001$ 、以下同様）、「かわり指標」子ども領域得点と NCATS 子ども領域得点（0.37、 $p < 0.001$ ）、「かわり指標」養育者得点と NCATS 養育者得点（0.79、 $p < 0.001$ ）であった。

「かわり指標」各領域と NCATS 得点では、子ども領域の＜主体性＞（0.50、 $p < 0.001$ ）、＜応答性＞（0.52、 $p < 0.001$ ）、＜共感性＞（0.41、 $p < 0.001$ ）、＜運動制御＞（0.37、 $p < 0.001$ ）、＜感情制御＞（0.22、 $p < 0.01$ ）であった。また、養育者領域の＜主体性発達への配慮＞ 0.46、＜応答性発達への配慮＞ 0.54、＜共感性発達への配慮＞ 0.46、＜認知発達への配慮＞ 0.69、＜社会情緒的発達への配慮＞ 0.58（いずれも $p < 0.001$ ）であった。

「かわり指標」子ども領域の各領域と NCATS 子ども領域では、子ども領域の＜主体性＞（0.53、 $p < 0.001$ ）、＜応答性＞（0.41、 $p < 0.001$ ）、＜共感性＞（0.29、 $p < 0.001$ ）、＜運動制御＞（0.24、 $p < 0.001$ ）、＜感情制御＞（ < 0.11 、有意差なし）であった。

「かわり指標」養育者領域の各領域と NCATS 養育者領域では、＜主体性発達への配慮＞ 0.51、＜応答性発達への配慮＞ 0.57、＜共感性発達への配慮＞ 0.52、＜認知発達への配慮＞ 0.74、＜社会情緒的発達への配慮＞ 0.64（いずれも $p < 0.001$ ）であった。

「かわり指標」は、子どもの社会能力を中心に養育者をはじめ子どもの周囲の環境を含めた測定を目的とし、子ども領域の項目が既存研究で広く用いられている社会能力の枠組みに沿っている点が特徴である。

NCATS は、子どものコミュニケーション能力等の社会能力や養育者と相互作用のパターンを評価する上で、信頼性、妥当性が確認されているスケールである。かわり指標全体では高

表2 かかわり指標と NCATS との相関

かかわり指標	NCATS					
	NCATS 得点	p	子ども領域得点	p	養育者領域得点	p
関係性総合評価	0.64	***	0.42	***	0.58	***
かかわり指標得点	0.67	***	0.38	***	0.67	***
子ども領域得点	0.48	***	0.37	***	0.39	***
養育者領域得点	0.72	***	0.28	***	0.79	***
子ども領域						
1. 主体性	0.50	***	0.53	***	0.30	***
2. 応答性	0.52	***	0.41	***	0.41	***
3. 共感性	0.41	***	0.29	***	0.35	***
4. 運動制御	0.37	***	0.24	***	0.33	***
5. 感情制御	0.22	**	0.11		0.23	***
養育者領域						
6. 主体性発達への配慮	0.46	***	0.18	**	0.51	***
7. 応答性発達への配慮	0.54	***	0.30	***	0.52	***
8. 共感性発達への配慮	0.46	***	0.09		0.57	***
9. 認知発達への配慮	0.69	***	0.28	***	0.74	***
10. 社会情緒発達への配慮	0.58	***	0.23	***	0.64	***

** : p<0.01, *** p : <0.001

い相関がみられた一方で、子ども領域の<運動制御><感情制御>との相関係数が比較的低い値であったのは、これらの項目が、子どもの社会性の特徴として別の側面を捉えたものであることが要因の一つとして考えられる。

全体、領域別にて、かかわり指標と NCATS に有意に正の相関が認められ、類似領域に関しては基準関連妥当性が示されたと同時に、かかわり指標と NCATS はある程度関連しあうものの、独立した側面を評価できるスケールであるといえる。

文 献

- 1) 安梅勅江、矢藤優子、篠原亮次、杉澤悠圭. 子どもの社会能力評価「かかわり指標」の妥当性と信頼性、日本保健福祉学会誌、2007、14 (1)、23-31.
- 2) Gary W.L. (2005) . Social Competence and the Search for Its Origins. IN: Children's Peer Relations and Social Competence A CENTURY OF PROGRESS, (eds Gary W.L) , pp.113-144. YALE UNIVERSITY PRESS. NEW Haven AND LONDON.
- 3) Morriset, C.E.. (1994) . What the Teaching Scale measures. In: Summer GS, Spietz A, eds.NCAST: Caregiver/Parent-child interaction feeding manual (98-121) . Seattle, Wash, USA: University of Washington NCAST Publications.

第3節 気になる子どもの判別妥当性

1. はじめに

気になる子どもを抱える保護者や保育の現場では、「何か他の子どもと違うのです。」という声を耳にすることが多い。日常生活の中で、子どもと向き合い、日々子どもの健やかな成長を育む人たちは、子どもたちが出すサインを敏感に、そして、ほぼ確実に捉えている。しかし、その子どもの出す明らかなサインを捉えながらも、何が違うのかを他人に理解してもらえるよう表現することは難しい。

気になる子どもとそうではない子どもは、どこが違うのであろうか。「他の子どもと違う」という表現からも分かるように、気になる子どもは、他者とのかかわりがどこかぎこちないなど、円滑ではないことが多い。かかわり指標は、子どもと他者とのかかわりの相互作用を測定するため、子どもの社会性の特徴を客観的に捉えることができる。

本節では、いわゆる「気になる子ども」¹⁾を対象にかかわり指標による評価を実施し、気になる状態のない子どもと比較し本指標の判別妥当性を検討した²⁾。気になる子どもとして、AD/HD (attention-deficit / hyperactivity disorder)、PDD (pervasive developmental disorders)、MR (mental retardation) に加えて、発達境界領域、虐待、ネグレクトの子ども、また、保護者側の要因として、不適切なかかわり、高ストレスと評定された保護者の子どもを対象とした。

現在、発達障害のある子どもはAD/HDでは2～17%、PDDは1%程度といわれている³⁾。しかしすべての子どもが診断を受けてはおらず、その数はまだ限られている。そのため、本節で紹介するデータは、例数は少ないものの貴重なデータである。

2. 対象と方法

対象は、全国18か所の保育園において「気になる子どもチェックシート(304項目)¹⁾」により、担当保育士が抽出した1～6歳の子どもであり、構造化した観察、および医療機関・児童相談所など関連機関の診断と所見を合わせて分析した。

体調不良などの者を除き「かかわり指標」実施の協力が得られた子ども58名に対して、同一検査者が「かかわり指標」の適用と6領域(会話、動作模倣、協調運動、概念、行動制御、対人性・特異行動)から構成される観察を実施した。「会話」は名前や年齢など、「動作模倣」は積み木タワーづくりなど、「協調運動」は片足立ちやケンケンなど、「概念」はじゃんけんやしりとりなど、「行動制御」は交互開閉や着席行動など、「対人性・特異行動」は共感性や特異な会話について、発達年齢に合わせて実施した。2名の評価者が「かかわり指標」を用いて評価し、一致度は90%以上であった。

関連機関の確定診断・所見より、1) AD/HD 2名、2) PDD 5名、3) MR(境界域を含む診断によるもの) 3名、4) 虐待4名を抽出した。同時に、保育士による経年的な子どもの発達と気になる行動調査、保護者に対する経年的な家庭でのかかわり状況調査より、5) 発達

表3 子どもの特性別属性

	全数 58人		1)AD/HD		2)PDD		3)MR		4)虐待 (ネグレクト)		5)発達境界 領域		6)不適切な かかわり		7)高ストレス		非該当群		
	該当数	割合%	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	該当数	項目あり数/ 該当数(%)	
			2	100	5	100	3	100	4	100	3	100	5	100	4	100	7	100	
年齢	1歳	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2歳	10	17	0	0	0	0	0	2	50	1	33	0	0	0	0	2	29	
	3歳	13	22	0	0	1	20	2	67	0	0	0	0	0	1	25	3	43	
	4歳	13	22	0	0	2	40	0	0	1	25	1	33	1	20	2	50	0	0
	5歳	11	19	1	50	1	20	1	33	1	25	0	0	2	40	1	25	1	14
	6歳	10	17	1	50	1	20	0	0	0	0	1	33	2	40	0	0	1	14
性別	男児	35	60	2	100	3	60	1	33	4	100	2	67	4	80	2	50	4	57
	女児	23	40	0	0	2	40	2	67	0	0	1	33	1	20	2	50	3	43

※1)～7)まで該当確定のみを該当数とした

境界領域（発達検査によるもの）3名、6）家庭での不適切なかかわり5名、7）養育者が高ストレス4名、に分類した。また、前記1)～7)のいずれも疑い、確定でない者を非該当群とし、これらの子どもの特徴と、「かかわり指標」の各領域との関連を検討した。

3. 結果と考察

(1) 対象特性

対象特性を表3に示す。全体では、1歳児1名、2歳児10名、3歳児13名、4歳児13名、5歳児11名、6歳児10名、男児35名、女児23名であった。

(2) 「かかわり指標」の特徴

非該当群は、関係性総合評価がすべての領域で「よくあてはまる」であり、全体的にポジティブ方向の評価であった（表4）。

一方、1)～7)の該当群については、＜関係性総合評価＞はAD/HD、PDDではすべてがネガティブ方向に、またMR、虐待ではネガティブ方向に評価される者が多くなっていた。

表4 子どもの特性別かわり指標得点分布

	1) AD/HD		2) PDD		3) MR		4) 虐待 (ネグレクト含)		5) 発達境界 領域		6) 不適切な かわり		7) 高ストレス		非該当群	
	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)	項目あり/ 該当数 (%)	項目なし/ 該当数 (%)
該当全数																
◎関係性総合評価 子どもと養育者が、調和のとれた関係性を築いている。	1. まったくあてはまらない	0	2	40	0	0	1	25	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	2	100	3	60	2	67	1	25	2	67	2	40	1	25	0
	3. どちらともいえない	0	0	0	0	1	33	2	50	0	0	0	0	1	25	0
	4. ややあてはまる	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5. よくあてはまる	0	0	0	0	0	0	0	0	1	33	3	60	2	50	7
1. 主体性 子どもが自分から養育者に働きかける。	1. まったくあてはまらない	0	0	2	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	0	0	0	0	1	33	2	50	1	33	2	40	0	0	0
	3. どちらともいえない	1	50	1	20	2	67	0	0	1	33	0	0	0	0	0
	4. ややあてはまる	1	50	1	20	0	0	2	50	0	0	1	20	2	50	0
	5. よくあてはまる	0	0	1	20	0	0	0	0	1	33	2	40	2	50	7
2. 応答性 子どもが養育者の動きに明確に反応する。	1. まったくあてはまらない	0	0	2	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	2	100	1	20	2	67	2	50	0	0	2	40	0	0	0
	3. どちらともいえない	0	0	1	20	0	0	2	50	1	33	0	0	0	0	0
	4. ややあてはまる	0	0	0	0	1	33	0	0	1	33	0	0	2	50	0
	5. よくあてはまる	0	0	1	20	0	0	0	0	1	33	3	60	2	50	7
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。	1. まったくあてはまらない	1	50	2	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	1	50	1	20	1	33	2	50	1	33	1	20	1	25	0
	3. どちらともいえない	0	0	1	20	1	33	1	25	1	33	0	0	0	0	0
	4. ややあてはまる	0	0	1	20	1	33	1	25	0	0	1	20	1	25	0
	5. よくあてはまる	0	0	0	0	0	0	0	0	1	33	3	60	2	50	7
4. 運動制御 子どもの動きが課題に向けられ、気になる動きがない。	1. まったくあてはまらない	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	2	100	2	40	2	67	2	50	0	0	1	20	0	0	0
	3. どちらともいえない	0	0	1	20	1	33	1	25	1	33	1	20	0	0	0
	4. ややあてはまる	0	0	1	20	0	0	1	25	1	33	0	0	0	0	0
	5. よくあてはまる	0	0	0	0	0	0	0	0	1	33	3	60	4	100	7
5. 感情制御 子どもが自分で感情の制御ができる。	1. まったくあてはまらない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2. あまりあてはまらない	1	50	4	80	1	33	3	75	1	33	2	40	1	25	0
	3. どちらともいえない	0	0	0	0	2	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4. ややあてはまる	1	50	1	20	0	0	1	25	1	33	0	0	1	25	0
	5. よくあてはまる	0	0	0	0	0	0	0	0	1	33	3	60	2	50	7

領域別に見ると、AD/HD では＜共感性領域＞、＜応答性領域＞、＜運動制御領域＞がすべてネガティブ方向、PDD、MR、発達境界領域では各領域でポジティブ方向とネガティブ方向に分かれバラツキが見られた。また、限られた人数であるという限界性はあるが、観察時の所見も含めると、虐待、不適切なかかわり、高ストレスでは、＜関係性総合評価＞とともに5領域の評価について、ポジティブ方向とネガティブ方向の二極化していると考えられる。

これらの結果より、発達障害のある子どもや家庭環境がハイリスクである子どもは、そうではない子どもと比較して、かかわり指標でみた社会能力にさまざまな特徴がある可能性が示された。

気になる子どもの判断は、＜関係性総合評価＞として「**子どもが養育者または検査者と調和のとれた関係性を築いているかどうか**」、子ども自身の能力として「**主体性、応答性、共感性、運動制御、感情制御の力がバランスよく発揮されているか**」を複数の目で確認し、子どもを取り巻く環境を総合的に全体像として捉えることが重要である。

文 献

- 1) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援－よい長時間保育の見わけかた－. 東京: 勁草書房, 2004: 1-144.
- 2) 安梅勅江、矢藤優子、篠原亮次、杉澤悠主. 子どもの社会能力評価「かかわり指標」の妥当性と信頼性、日本保健福祉学会誌、2007: 14 (1)、23-31.
- 3) 小枝達也、加我牧子、杉山登志郎、橋本俊顕他. ADHD,LD,HFPDD,軽度MR児 保健指導マニュアル: ちょっと気になる子どもたちへの贈りもの. 東京. 診断と治療社、2004: 1-163.

第4節 得点分布と年齢別推移

近年、子どもの社会性への関心が高まる中で、すすくコホート（27頁参照）では、「かかわり指標」を用いて子どもの社会性がどのように発達していくのか、その軌跡や関連要因を検討している。その結果の一部である年齢別得点分布について紹介する。

対象は、すすくコホートに参加した子ども 18 か月 231 名(男児 117 名、女児 114 名)、30 か月 344 名(男児 168 名、女児 176 名)、42 か月 207 名(男児 103 名、女児 104 名)、7 歳 82 名 (男児 47 名、女児 35 名) とその養育者である。

18 か月、30 か月、42 か月、7 歳のすべての時点で、およそ 8 割程度の子どもが「ややあてはまる」「よくあてはまる」に該当していた(表 5、6)。一般的に気になる子どもは、グレーゾーンを含めると 2～3 割程度と言われている。特に 18 か月～42 か月の時期は、いまだ発達のばらつきが大きいいため、気になる子どもを見落とさない観察が求められる。

「かかわり指標」の各領域について、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」に該当した子どもは、グレーゾーンを含めた気になる子どもとして継続的に観察し支援していく目安になる。養育者側においてもほぼ同様の結果であった。

表5 年齢別 かかわり指標得点分布 子ども領域

項目	カテゴリー	18か月 (231人)		30か月 (344人)		42か月 (207人)		7歳 (82人)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0
	2. あまりあてはまらない	0	0.0	7	2.0	1	0.5	2	2.4
	3. どちらともいえない	20	8.7	24	7.0	14	6.8	2	2.4
	4. ややあてはまる	80	34.6	118	34.3	108	52.1	29	35.4
	5. よくあてはまる	131	56.7	194	56.4	84	40.6	49	59.8
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0
	2. あまりあてはまらない	3	1.3	6	1.7	6	2.9	4	4.9
	3. どちらともいえない	15	6.5	37	10.8	23	11.1	5	6.1
	4. ややあてはまる	77	33.3	119	34.6	110	53.1	22	26.8
	5. よくあてはまる	136	58.9	181	52.6	68	32.9	51	62.2
3. 共感性 不自然な動きがなく、 相手の様子に対応して行動する。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	2	0.5	0	0.0	3	3.7
	2. あまりあてはまらない	3	1.3	25	7.3	15	7.3	2	2.4
	3. どちらともいえない	26	11.3	70	20.4	44	21.3	9	11.0
	4. ややあてはまる	49	21.2	102	29.6	95	45.8	32	39.0
	5. よくあてはまる	153	66.2	145	42.2	53	25.6	36	43.9
4. 運動制御 動きが課題に向けられ、 気になる動きがない。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	1	0.3	0	0.0	3	3.7
	2. あまりあてはまらない	6	2.6	6	1.7	9	4.4	2	2.4
	3. どちらともいえない	25	10.8	22	6.4	34	16.4	5	6.1
	4. ややあてはまる	65	28.1	100	29.1	103	49.7	11	13.4
	5. よくあてはまる	135	58.4	215	62.5	61	29.5	61	74.4
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。	1. まったくあてはまらない	1	0.5	0	0.0	0	0.0	1	1.2
	2. あまりあてはまらない	12	5.2	16	4.7	12	5.8	2	2.4
	3. どちらともいえない	25	10.8	54	15.7	47	22.7	4	4.9
	4. ややあてはまる	80	34.6	112	32.5	88	42.5	22	26.8
	5. よくあてはまる	113	48.9	162	47.1	60	29.0	53	64.7
◎関係性総合評価 養育者と子どもが、調和のとれた 関係性を築いている。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
	2. あまりあてはまらない	8	3.5	15	4.4	10	4.8	4	4.9
	3. どちらともいえない	36	15.6	72	20.9	44	21.3	20	24.4
	4. ややあてはまる	102	44.1	148	43.0	107	51.7	42	51.2
	5. よくあてはまる	85	36.8	109	31.7	46	22.2	15	18.3

子ども領域得点と養育者領域得点をみると、子ども領域では、7～8割の子どもが20点以上であった(表7)。養育者領域では、20点以上の割合は、18か月では84.0%、30か月70.2%、42か月68.5%、7歳59.8%と子どもの年齢による違いがみられた。

18か月と42か月の子ども177名はコホートとして継続的に観察した集団、7歳については別集団と、一概に年齢別の推移を比較することはできない。しかし上記結果より、気になる子どもを見分ける基準への示唆が得られた。

表6 年齢別 かかわり指標得点分布 養育者領域

項目	カテゴリー	18か月 (231人)		30か月 (344人)		42か月 (207人)		7歳 (82人)	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	2. あまりあてはまらない	5	2.2	6	1.7	8	3.9	8	9.8
	3. どちらともいえない	9	3.9	37	10.8	29	14.0	16	19.5
	4. ややあてはまる	49	21.2	138	40.1	110	53.1	27	32.9
	5. よくあてはまる	168	72.7	163	47.4	60	29.0	31	37.8
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
	2. あまりあてはまらない	2	0.9	1	0.3	2	1.0	2	2.4
	3. どちらともいえない	5	2.2	27	7.8	25	12.1	13	15.9
	4. ややあてはまる	56	24.2	133	38.7	123	59.4	25	30.5
	5. よくあてはまる	168	72.7	183	53.2	57	27.5	41	50.0
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	2. あまりあてはまらない	3	1.3	2	0.6	5	2.4	8	9.7
	3. どちらともいえない	13	5.6	42	12.2	32	15.5	20	24.4
	4. ややあてはまる	72	31.2	150	43.6	117	56.5	41	50.0
	5. よくあてはまる	143	61.9	150	43.6	53	25.6	13	15.9
9. 認知発達への配慮 子どもの認知能力の発達を促す働きかけをする。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.4
	2. あまりあてはまらない	14	6.1	11	3.2	7	3.4	9	11.0
	3. どちらともいえない	76	32.9	118	34.3	40	19.3	19	23.2
	4. ややあてはまる	86	37.2	154	44.8	132	63.8	40	48.8
	5. よくあてはまる	55	23.8	61	17.7	28	13.5	12	14.6
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	2. あまりあてはまらない	2	0.9	7	2.1	7	3.4	6	7.3
	3. どちらともいえない	22	9.5	41	11.9	23	11.1	4	4.9
	4. ややあてはまる	96	41.5	148	43.0	122	58.9	45	54.9
	5. よくあてはまる	111	48.1	148	43.0	55	26.6	27	32.9
◎関係性総合評価 養育者と子どもが、調和のとれた関係性を築いている。	1. まったくあてはまらない	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
	2. あまりあてはまらない	8	3.4	15	4.4	10	4.8	4	4.9
	3. どちらともいえない	36	15.6	72	20.9	44	21.3	20	24.4
	4. ややあてはまる	102	44.2	148	43.0	107	51.7	42	51.2
	5. よくあてはまる	85	36.8	109	31.7	46	22.2	15	18.3

すなわち各領域について「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」に該当した者は、継続的な観察や支援の必要性の高い可能性がある。合計得点の評価についてはさらなる経年調査が求められるが、「各領域の評価のバラツキとバランス」を加味した検討が求められる。

表7 年齢別 子ども領域得点と養育者領域得点の分布

項目	カテゴリー	18 か月 (231人)		30 か月 (344人)		42 か月 (207人)		7 歳 (82人)		
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
子ども領域得点 (5～25点)	5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	6	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0	
	7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	10	0	0.0	1	0.3	0	0.0	2	2.4	
	11	0	0.0	0	0.0	2	1.0	1	1.2	
	12	1	0.4	3	0.9	2	1.0	0	0.0	
	13	5	2.2	4	1.2	1	0.5	1	1.2	
	14	2	0.9	6	1.8	6	2.9	0	0.0	
	15	2	0.9	8	2.4	7	3.3	0	0.0	
	16	7	3.0	10	2.9	5	2.4	0	0.0	
	17	5	2.2	9	2.6	14	6.8	2	2.4	
	18	8	3.5	21	6.1	17	8.2	3	3.7	
	19	10	4.3	22	6.4	20	9.7	4	4.9	
	20	18	7.8	34	9.9	41	19.8	3	3.7	
	21	17	7.3	30	8.7	17	8.2	8	9.7	
	22	13	5.6	24	7.0	16	7.7	10	12.2	
	23	38	16.4	26	7.6	14	6.8	11	13.4	
	24	42	18.2	43	12.5	10	4.8	14	17.1	
	25	63	27.3	102	29.7	35	16.9	23	28.1	
	養育者領域得点 (5～25点)	5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
		8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2
9		0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.2	
10		0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0	
11		0	0.0	0	0.0	1	0.5	0	0.0	
12		1	0.4	1	0.3	0	0.0	2	2.4	
13		3	1.3	5	1.5	5	2.4	2	2.4	
14		2	0.9	4	1.2	2	1.0	4	4.9	
15		1	0.4	3	0.9	6	2.9	2	2.4	
16		2	0.9	11	3.2	8	3.9	4	4.9	
17		6	2.6	12	3.5	8	3.9	3	3.7	
18		8	3.5	22	6.4	18	8.7	5	6.1	
19		14	6.0	43	12.5	17	8.2	9	11.0	
20		21	9.1	45	13.0	56	27.0	11	13.4	
21		23	10.0	26	7.5	18	8.7	7	8.6	
22		25	10.8	34	9.9	27	13.0	13	15.9	
23		42	18.2	40	11.6	12	5.8	4	4.9	
24		44	19.0	54	15.7	12	5.8	7	8.5	
25		39	16.9	43	12.5	17	8.2	7	8.5	

第 5 章

質問紙を用いた気になる子どもの早期発見： 「幼児用社会的スキル指標」

実践でのさらなる活用を意図し、子どもの社会的スキルに焦点を当てた質問紙法の「**幼児用社会的スキル指標 (Social Skill Scale for preschool children,SSS)**」を開発した¹⁾ (Appendix 4 参照)。

この指標は、国内外の既存研究でもっとも多く用いられている「**自己表現 (assertion)**」「**自己制御 (self-control)**」「**協調 (cooperation)**」の3因子、各8項目、計24項目で構成されている(表1)。1万人以上の2～6歳児を対象に、年齢別因子構造の安定性に基づき抽出した項目を採用し²⁾、広汎性発達障害児の判別妥当性が検証されている³⁾。

「自己表現」は自己紹介ができる、会話を続ける、自らの要求をきちんと述べるなど自分自身や自分の意思を明確に説明したり表現すること、「自己制御」は葛藤場面で適切に対応できる、交代や譲歩ができるなど自分の欲求や要求を抑えたうえで振る舞う行動をとること、「協調」は他人を助けたり、ものを共有するなど仲間や大人に対して協調的で共感的な行動をとること、を表している。

保護者や保育士など子どもに日常的にかかわる専門職が、各項目について「ない」「時々」「いつも」と3件法で評価し、5分ほどで実施できる。

採点は、各項目の「ない」を0点、「時々」を1点、「いつも」を2点として得点化し、合計して因子ごとの得点を算出する。

「**かかわり指標**」との基準関連妥当性に関しては、下記の手順で確認した。

保育士により気になる子どもとしてあげられた全国98か所の認可保育園に在籍する2～6歳の保育園児121名に対し、担当保育士による「**幼児用社会的スキル指標**」の評価、および同一検査者による「**かかわり指標**」子ども側面を用いた観察を合わせて分析した。幼児用社会的スキル指標の各因子得点、総合得点と「**かかわり指標**」の各領域得点、子ども総合得点との相関を算出した。

その結果、「**幼児用社会的スキル指標**」の総合得点と「**かかわり指標**」のすべての領域において、有意な関連が見られた。また「**幼児用社会的スキル指標**」の<自己表現因子>と「**かかわり指標**」の<主体性領域>、「**幼児用社会的スキル指標**」の<自己制御因子>と「**かかわり指標**」の、<運動制御><感情制御>、「**幼児用社会的スキル指標**」の<協調因子>と「**かかわり指標**」の<応答性領域><共感性領域>で有意に関連がみられ、基準関連妥当性が示された。

表1 幼児用社会的スキル指標

第1因子 自己表現	第2因子 自己制御	第3因子 協調
だれかが話をしたら顔を見る	他の子に攻撃的な態度をとらない	けがをした友だちを助ける
だれかが話をしたらなんらかの明らかな反応をする	「あとで」と言われて待つことができる	さびしそうな友だちを元気づける
なにかしてもらおうと、うれしそうな顔をする	持っているものを他の子とわけあう	だれかが失敗するとはげましたりなくさめたりする
気持ちを顔に出す	人の話を最後まで聞く	だれかが上手にできたらうれしい
あいさつをする	順番がわかる	だれかが上手にできたら「じょうず」とほめる
人に近づきおしゃべりをする	おもちゃの貸し借りをする	いいと思ったらその人に「いいね」という
話をするときには顔を見る	必要な場面ではお行儀よくしてられる	友だちになにか頼まれると手助けする
さそわれれば遊び仲間に入れる	ほしいものがあっても説得されればまんできる	自分から友だちを手伝う

「幼児用社会的スキル指標」および「かかわり指標」は、ともに子どもの社会性を短時間の行動観察により客観的に測定できるツールである。場面により使い分けることで、子育て・子育て支援に携わるさまざまな分野において今後の幅広い活用が期待される。

文献

- 1) 恩田陽子、篠原亮次、杉澤悠圭、童連、田中笑子、渡辺多恵子、安梅勅江. 就学前児用社会的スキル尺度の妥当性に関する検討. 日本公衆衛生学会抄録. 2009
- 2) 高橋雄介、岡田謙介、星野崇宏、安梅勅江. 就学前児の社会的スキル. 教育心理学研究 2008 ; 56 : 81-92.
- 3) 篠原亮次、星野崇宏、杉澤悠圭、童連、田中笑子、渡辺多恵子、恩田陽子、安梅勅江. 就学前児用社会的スキル尺度と広汎性発達障害 (PDD) との関連. 厚生指標. 2009 ; 17.

第6章

実践例

本章では、自閉症傾向、広汎性発達障害傾向、注意欠陥多動性障害傾向、知的障害傾向、虐待傾向の各事例について、事例の概要、「かかわり指標」を用いた評価の実際、早期支援に向けたポイントを整理する。

第1節 自閉症傾向の事例

1. 事例の概要

Aさん（3歳男児）は、妊娠分娩の経過には異常はなかった。歩き始めは1歳。1歳6か月健診では単語しか話せないことで経過観察と判定されていた。2歳の時に健診を再受診したが、この時点でも単語が数語で、指差して教えることがみられず、抱っこされることを非常にいやがる様子が見られた。母親の悩みはことばが遅いことと、極端な偏食で白飯と肉とフライドポテトしか食べないということだった。

母親の仕事の関係で3歳になってから保育園に入所することになった。保育園ではマイペースに行動することが多く、他の子どもへの関心があまりないようだった。回転椅子をくるくる回す遊びを続けたり扇風機のプロペラをじっとみたりすることがあった。カレンダーの数字をながめることも好きだった。集団遊びにはほとんど参加できず、他の子どもと手をつなぐことを極端に嫌がった。家庭では一人遊びを好み、ミニカーを直線上に並べて床に頭をつけてながめてはとても気に入っている様子で、ミニカーの車輪を何度も回しては横目でそれを見るという遊びを繰り返していた。

2. 「かかわり指標」を用いた評価の実際

「かかわり指標」を用いた評価結果は、表1のとおりである。

3. 早期支援に向けたポイント

「かかわり指標」観察場面での特徴は、子どもは非常にマイペースで課題に取り組み、養育者はそれを支援する努力はみられるがあまり功を奏していない印象がある。子どもは主体的に行動しようとするがどのようにしてよいかわからないために思うようにいかずに不機嫌にな

表1 自閉症傾向児の「かかわり指標」記入例

かかわり指標

記入日 ○年○月○日：氏名 A (男) 女 3歳0月：記入者 H

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちらとも いえない	やや あてはまる	よく あてはまる
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。	1.	2.	3.	4.	5.
		目を合わせない、発声や自己主張がない			
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。	1.	2.	3.	4.	5.
	まったく応答しない、無視する				
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。	1.	2.	3.	4.	5.
	養育者にほぼ無関心				
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。	1.	2.	3.	4.	5.
	多少不自然な動きがある				
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。	1.	2.	3.	4.	5.
	時々感情が押さえられなくなる				

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
	どちらとも言えない				
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
	子どもがかかわりやすいよう多少配慮している				
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
	ほめるものの、時にタイミングがずれ、子どもに伝わっていない				
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
	説明はわかりやすいが時にタイミングがずれる				
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
	どなたたりたいたりしないが、口調は強い				
◎ 関係性総合評価	1.	2.	3.	4.	5.
	子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。かかわりがまったくないわけでもないがスムーズではない				

る。母親はなだめようと努力するが子どもがそれに応答する感じではなく、しばらく声かけをやめると何とか落ち着いてくるという状況がみられた。

本児は自閉症が疑われる子どもである。自閉症はコミュニケーション行動や社会的相互作用の未熟性、および興味関心の限定として特徴づけられる発達障害であるが、言葉の遅れで気づかれることが多い。1対1の関係性を形成しがたいために集団適応も困難であることが多い。主体的に行動しようとする様子がみられるが知的障害を併存する場合が多いため言語的な指示の理解が難しい。視覚的な手がかりを利用することが有効であるが言語的なかわりを重視してしまうとかえって子どもの混乱を引き起こすことにつながる可能性がある。養育者と子どもの関係性は、過剰に言葉かけをしたり、子どもの主体性を阻害してしまうような働きかけになりがちでうまくかみあわない場面が認められる。

言語的なはたらきかけよりも**視覚的な手がかり**を用いた指示によって指示がとおりやすくなる。上手にできたことは子どもが喜ぶ刺激やごほうびを使うなどして**達成感**を持たせることにより、かみあわない指示と反応というパターンを減らすことが可能になることが期待され、関係性が改善することが予想される。また子どもの主体的な行動と指示がかみ合うことにより、応答性や共感性が改善すると考えられる。

第2節 広汎性発達障害傾向の事例

1. 事例の概要

Bさん(6歳男児)は、妊娠分娩の経過は異常がなかった。運動発達正常。始語2歳と健診で軽度の遅れを指摘されたが、3歳の時には会話が可能になっていた。3歳から保育園に通い始めたが集団保育にはすぐに飽きてしまった。どちらかというところ一人遊びが好きで、遠足などに行ったときに道ばたで拾った小石に名前をつけて箱にしまっておき、その箱を保育園に持参し「石子ちゃん遊び」をすることに熱中していた。

他の子どもとのかかわりかたは一方的で、急に昔のテレビ番組の話を始めたりアニメのせりふで話しかけたりすることから、他の子どもからは敬遠されがちだった。学習の課題には積極的に取り組み、5歳時には「漢字博士」とよばれるほど難しい漢字も読み書きができるようになっていた。

両親は早期教育に熱心であり、英語塾にも通わせていた。渡航歴はないにもかかわらず、日本語よりも英語のほうが上手に話せる、と評価されていた。6歳からはそろばんの塾にも通い始めた。この頃から寝る前になると、枕元にお気に入りのぬいぐるみを20個以上きちんと並べてから寝るという儀式的な行動にこだわるようになった。

2. 「かかわり指標」を用いた評価の実際

「かかわり指標」を用いた評価結果は、表2のとおりである。

表2 広汎性発達障害傾向児の「かかわり指標」記入例

かかわり指標

記入日 ○年 ○月 ○日：氏名 B

男 女 6歳 0月：記入者 H

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったくあてはまらない 1.	あまりあてはまらない 2.	どちらともいえない 3.	ややあてはまる 4.	よくあてはまる 5.
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。				④	
	働きかけるがマイペースな部分あり				
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。				④	
	時々一方的なコミュニケーションをとる				
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。				④	
	時々マイペースな部分がある				
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。				④	
	多少常動的な不自然な行動がある				
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。		②			
	細部にこだわりなかなか立ち直れない				

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。				④	
	ほぼOKだが時に手を出そうとする				
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。				④	
	ほぼOKだが、時にタイミングがずれる				
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。					⑤
	タイミングよくほめ、思いやりのある態度をとる				
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。				④	
	時に細部へのこだわりがみられる				
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。				④	
	やさしく言葉かけるが、多少緊張感がある				
◎ 関係性総合評価 子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。				④	
	ほぼOK				

3. 早期支援に向けたポイント

課題に取り組みながら、アニメのせりふを一人芝居のように話していた。こちらからの問いかけには反応せずに、マイペースで取り組んでいた。できないところについては指示を求めるが、その指示にはあまり従わず、自分なりの方法で解決しようと試みていた。養育者との関係性はどことなくぎこちなく、養育者は子どもの反応にどう対応していいか考えあぐねている様子がみられた。一方で課題の遂行に対しては、完璧にすることにこだわる様子が子どもにも養育者にも認められた。

本児は、広汎性発達障害が疑われる子どもである。独特の**こだわり行動**や**一方的なコミュニケーション行動**がめだち、社会的な場面の意味を読み取ることに困難がある。細部へのこだわりが強いために全体の課題をみわたすことができず、また養育者も完璧をもとめる傾向がある場合は、子どものこだわり行動をさらに強めてしまう可能性がある。

十分な主体性を持ちながらも社会的な場面でそれを発揮できないという特徴を踏まえ、ある程度の**マイペースさを容認**しながら結果には幅をもたせること、すなわち細部へのこだわりを強める働きかけを控えることが大切である。応答性や反応性について改善することは困難である。しかしある程度**養育者側が波長を合わせる**ことにより、関係性は改善していくことが期待できる。

第3節 注意欠陥多動性障害傾向の事例

1. 事例の概要

Cさん（5歳男児）は、妊娠分娩の経過には特に異常はなかった。乳児期は「かんのむし」と称されるほど過敏で夜泣きがひどく手がかかる子どもだった。始歩1歳、始語1歳2か月。乳幼児健診で問題を指摘されたことはないというが転居が多く母子手帳には十分な記載がなされていなかった。

4歳から幼稚園に入園した。手先が不器用ではさみは上手に使用できず、かけっこの時はからだか傾き、片足けんけんなどの遊びはできなかった。集団遊びではおしゃべりで周りを笑わせることが多く人気ものではあったが、落ち着いて座って話を聞くことは苦手で、読み聞かせなどのときは自分で勝手にストーリーを創って先にしゃべってしまうという行動がみられた。

2. 「かかわり指標」を用いた評価の実際

「かかわり指標」を用いた評価結果は、**表3**のとおりである。

3. 早期支援に向けたポイント

課題にはすぐにとりかかり、おしゃべりもとまらない。長時間同一の課題に集中することは難しく、すぐに飽きてしまう。ほめられるとうれしそうにするので、養育者もそれをうまく使っ

表3 注意欠陥多動性障害傾向児の「かかわり指標」記入例

かかわり指標

記入日 ○年 ○月 ○日：氏名 C

男・女 5歳 0月：記入者 A

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

1. 主体性

自分から養育者に働きかける。

まったくあてはまらない 1. あまりあてはまらない 2. どちらともいえない 3. ややあてはまる 4. ○ よくあてはまる 5.

養育者の関心を時に引こうとする

2. 応答性

養育者の動きに明確に反応する。

1. 2. 3. 4. ○ 5.

養育者に時に応答するが落ち着きなく動きまわる

3. 共感性

養育者の行動や状況に即した行動をする。

1. 2. 3. ○ 4. 5.

参照視がみられ、時に養育者に向かい発声する

4. 運動制御

不自然な動きや気になる動きがない。

1. 2. ○ 3. 4. 5.

手先が不器用

5. 感情制御

自分で感情の制御ができる。

1. 2. ○ 3. 4. 5.

すぐにあきてしまう

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮

子どもの主体性を促す働きかけをする。

1. 2. ○ 3. 4. 5.

対応に苦慮している

7. 応答性発達への配慮

子どもの応答性を促す働きかけをする。

1. ○ 2. 3. 4. 5.

どう応答していいかわからない様子

8. 共感性発達への配慮

子どもの共感性を促す働きかけをする。

1. 2. ○ 3. 4. 5.

一緒に完成を喜ぶが、それ以外はごちない

9. 認知発達への配慮

子どもの認知発達を促す働きかけをする。

1. 2. 3. ○ 4. 5.

できるよう配慮しようとするが、十分に対応できていない

10. 社会情緒発達への配慮

子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。

1. ○ 2. 3. 4. 5.

どなる、たたく

◎ 関係性総合評価

子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。調和のある関係性を築けていない

1. ○ 2. 3. 4. 5.

て課題を遂行させていた。手先の不器用さがあり、細かい作業は困難であったが、養育者はうまく手を貸してやりながらいっしょに完成を喜ぶことができた。

本児は、注意欠陥多動性障害が疑われる子どもである。多動は状況に左右されることは少なく行動の様子は常にオーバードライブ状態にある。注意を集中させるための働きかけが重要であり、適切な支援によって課題を達成させること、ほめることで自信をつけていくことが大切である。

子どもに対しては 1) 教示を短く具体的にわかりやすくすること、2) 指示に従うまで待つこと、3) うまく教示に乗れたらそれをほめること、という対応を心がけることで、**得意な領域をのばす**ことを考慮する。

養育者に対しては「かかわり指標」の結果をフィードバックする。行動の特徴が認知的な偏りから生じている可能性を**理解**することで、子どもの苦手な部分について手助けする、上手にできることはできるだけ主体的に行動させる等を心がけることが望ましい。子どもも養育者も**自信**をつけることで総合的な関係性が改善することが期待できる。

第4節 知的障害傾向の事例

1. 事例の概要

Dさん（3歳女児）は、在胎32週、帝王切開で出生した。出生体重は2,200g。軽度の呼吸障害があり新生児集中治療室で保育器に収容され3日間酸素投与、1週間後に保育器を出て、その後1か月新生児集中治療室に入院した。始歩1歳8か月、始語2歳。歩行はやや不安定で転びやすい。医学的検査所見には異常は認められない。

家庭では絵本を持って来て一緒に見ることをせがみ、「～はどれ」と尋ねるとにこやかに指をさす。単語は「ママ」「パパ」「ないない」「あんぱん」程度。トイレトレーニングを試みたが、尿意便意ともに分からない様子であった。親戚が来るとうれしそうにするが、知らない人に対しては人見知り強く泣き叫ぶ。いったん泣き始めると、容易になだめることができない。

2. 「かかわり指標」を用いた評価の実際

「かかわり指標」を用いた評価結果は、表4のとおりである。

3. 早期支援に向けたポイント

養育者は熱心に課題に取り組ませようとするが、うまくいかず試行錯誤を繰り返している様子がみられた。互いの情緒応答性は良好であり、子どものペースにあわせて支援しようとする行動がみられるが、能力的にそぐわないことも子どもにさせようとする部分がある。過敏性のためになだめることが難しいが、養育者が関わると比較的すぐに落ち着く傾向があるようだ。

表4 知的障害傾向児の「かかわり指標」記入例

かかわり指標

記入日 ○年 ○月 ○日：氏名 D

男 女 3歳 0月：記入者 S

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちらとも いえない	やや あてはまる	よく あてはまる
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。	1.	2.	3.	4.	<input checked="" type="radio"/> 5.
	養育者の気を引こうと働きかける				
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。	1.	2.	3.	4.	<input checked="" type="radio"/> 5.
	養育者に応じようとする				
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。	1.	2.	3.	<input checked="" type="radio"/> 4.	5.
	養育者の動きに関心を示すものの時にずれる				
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。	1.	2.	<input checked="" type="radio"/> 3.	4.	5.
	発達面で気になる動きが若干ある				
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。	1.	2.	<input checked="" type="radio"/> 3.	4.	5.
	ひとりで立ち直ることが難しい				

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	<input checked="" type="radio"/> 4.	5.
	熱心に取り組ませようとするが、時にうまくいかない				
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	<input checked="" type="radio"/> 5.
	子どものペースにうまく合わせる				
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	<input checked="" type="radio"/> 4.	5.
	なだめることが時に難しい				
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。	1.	2.	<input checked="" type="radio"/> 3.	4.	5.
	子どもの能力にそぐわないことをさせようとする				
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	<input checked="" type="radio"/> 5.
	子どもをしっかり受け取る努力をしている				
◎ 関係性総合評価 子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。	1.	2.	3.	<input checked="" type="radio"/> 4.	5.
	子どもの状況に合わせたかかわりへの努力がみられる				

本児は知的障害が疑われる子どもである。全般的な発達遅れのために、能力的には課題遂行が困難な場面が多い。養育者が子どもの**発達レベル**や**能力のパターン**を理解することで、適切なかわりを持てることが期待できる。

「かわり指標」から得られた所見を養育者に**フィードバック**することで、子どもの能力の特性や限界を理解できる。子どもの特徴をつかんだ上で必要なレベルの支援を考慮することで、さらに子どもの**主体性を引き出す**ことが可能になると期待できる。また上手にできたことを子どもに伝えると子どもの応答性が伸びることや、子どもの主体性がさらに養育者の応答性を高めることにつながっていくと考えられる。

第5節 虐待傾向の事例

1. 事例の概要

Eさん（5歳男児）は、在胎24週、胎児仮死のため緊急帝王切開で生まれた。出生体重940g。重度の呼吸窮迫症候群と新生児仮死がみられ、およそ2か月間の人工呼吸管理を受けた。保育器から出た後も呼吸障害が残り、退院直前まで酸素投与を受けた。退院後は家庭での養育が困難であったため、3歳まで乳児院にいた。始歩は修正月齢で14か月、始語は修正月齢で16か月。その後の運動発達に大きな問題はなく、麻痺や歩行障害などの神経学的な症状は認められなかった。言葉も3歳ごろには、会話が問題なくできるようになった。

乳児院での集団保育の場面では、やや落ち着きがなく動き回り、家具にぶつかったり転んだりすることが多かった。乳児院退院後は家庭で生活していたが、同居している継父になかなかなつかず、動きも激しいことから、しつけと称した体罰が行われているようだった。

4歳から幼稚園に入園、集団遊びの場面では大はしゃぎしてしまい、悪ふざけから隣の子どもをたたいたり突き飛ばしたりする様子がみられた。一つの遊びに集中できず、遊具の取り扱いが雑で順番を待てないことから、他の子どもとのトラブルが耐えなかった。男性の保育士にしかられ、固まってしまうことがあった。偏食はないが給食はむさぼるように食べ、他の子どもものものにも手を出す。衣服は汚れて汚く、ふくらはぎには皮下血腫がみられていた。

2. 「かわり指標」を用いた評価の実際

「かわり指標」を用いた評価結果は、表5のとおりである。

3. 早期支援に向けたポイント

課題には指示も聞かずにすぐに取り組むが、うまくいかないと非常に不安げな表情となり、しきりに養育者の顔色をみている。課題について手伝いを求めることはしないが、できないとすぐに投げ出してしまふ。その様子を見て養育者がどなりつけたりしかったりすることで、えって子どもはおびえてしまふ様子がみられた。

表5 虐待傾向の「かかわり指標」記入例

かかわり指標

記入日 ○年○月○日：氏名 E (男)女 5歳0月：記入者 S

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	どちらとも いえない	やや あてはまる	よく あてはまる
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。	1.	2.	3.	4.	5.
		養育者の顔色を気にして不安げに見る			
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。	1.	2.	3.	4.	5.
		始めは気にしていたが養育者の表情の変化後避ける			
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。	1.	2.	3.	4.	5.
		養育者にたたかれて避ける			
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。	1.	2.	3.	4.	5.
		緊張すると運動制御が難しい			
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。	1.	2.	3.	4.	5.
		緊張すると感情制御が難しい			

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
		主体的に動くことを時に認めない			
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
		子どもへの関心はあるが、時に無視する			
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
		子どもをほめることもあるが、一方的にしかることもある			
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
		権威的な態度で命令する			
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。	1.	2.	3.	4.	5.
		意にそぐわない行動には手を出してしかる			
◎ 関係性総合評価 子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。	1.	2.	3.	4.	5.
		子どもの状態に適合したかかわり方のスキルが求められる			

部屋を飛び出そうとした時に、養育者は子どもをつかまえておしりをたたき行動がみられた。そのためますます子どもは課題に集中することができなくなった。養育者はこのようなことが、家庭でも繰り返されていると述べた。この子の行動でいかに家族が迷惑しているかを、支援者に向かってとうとうと話始める様子がみられた。

本児は、多動や衝動性が目立つが、家庭の背景として虐待が疑われる子どもである。行動パターンは一見、注意欠陥多動性障害を思わせるが、多動が目立つ場面は緊張が高まっている場面に多い。養育者が強い口調で指示するとかえって多動がひどくなるか、もしくは固まってしまう様子がみられる。体罰や力づくによる関係性は修正が困難であり、子どもへの支援とともに**養育者のかかわり方に対する支援**が重要である。

養育者に対しては、子どもの行動のなりたちを理解させ、問題行動を引き起こさない対応を心掛けるよう助言する。多動や落ち着きのなさは、不安や緊張という情緒的な状態からくると考えられ、十分な主体性がありながらも養育者からの評価を気にしてそれを発揮できないでいる。

問題行動は無視することにして、まずうまくいったことを**認める、ほめる**という対応でさらに主体性を発揮することが可能になる。また自分のかかわりにより子どもの主体性や応答性が改善することから、養育者にとっても**育児に自信**をもつことができるようになり、応答性や社会情緒発達のためのかかわりの行動も変化していくことが期待できる。

子どもに対しては、うまくいかなかったことに対して「どうしたかったのか」を尋ね、「次はどうするか」を具体的に考えることで同じ失敗を繰り返さないような支援が必要である。情緒的な問題が改善することで、主体性や共感性の部分が改善していく。

参 考 資 料

- Appendix 1 かかわり指標
- Appendix 2 Interaction Rating Scale (IRS10)
- Appendix 3 Information of Interaction Rating Scale (IRS) :
Description of Measure
- Appendix 4 幼児用社会的スキル指標

Appendix 1

かかわり指標

記入日 年 月 日：氏名 ， 男・女 歳 月：記入者

各項目について、該当する数字に○をつけてください。

<子ども側面>

	まったく あてはまらない 1.	あまり あてはまらない 2.	どちらとも いえない 3.	やや あてはまる 4.	よく あてはまる 5.
1. 主体性 自分から養育者に働きかける。					
2. 応答性 養育者の動きに明確に反応する。					
3. 共感性 養育者の行動や状況に即した行動をする。					
4. 運動制御 不自然な動きや気になる動きがない。					
5. 感情制御 自分で感情の制御ができる。					

<養育者側面>

6. 主体性発達への配慮 子どもの主体性を促す働きかけをする。					
7. 応答性発達への配慮 子どもの応答性を促す働きかけをする。					
8. 共感性発達への配慮 子どもの共感性を促す働きかけをする。					
9. 認知発達への配慮 子どもの認知発達を促す働きかけをする。					
10. 社会情緒発達への配慮 子どもの社会情緒的発達を促す働きかけをする。					
◎ 関係性総合評価 子どもと養育者が調和のとれた関係性を築いている。					

Appendix 2

Interaction Rating Scale (IRS10)

Please provide your evaluations on each item.

	Name	Gender	M·F	Age					
<i>Child Related Items</i>									
					not evident at all	not evident	neutral	evident	evident at high level
A. AUTONOMY					1.	2.	3.	4.	5.
Child initiates interaction with caregiver.									
B. RESPONSIVENESS					1.	2.	3.	4.	5.
Child is responsive to caregiver.									
C. EMPATHY					1.	2.	3.	4.	5.
Child behaves in accord with caregiver's affective expression.									
D. MOTOR SELF REGULATION					1.	2.	3.	4.	5.
Child's behavior is physically self regulated.									
E. EMOTIONAL SELF REGULATION					1.	2.	3.	4.	5.
Child adjusts his/her emotional state to a comfortable level.									
<i>Caregiver Related Items</i>									
F. RESPECT FOR AUTONOMY					1.	2.	3.	4.	5.
Caregiver encourages child's autonomy.									
G. RESPECT FOR RESPONSIVENESS					1.	2.	3.	4.	5.
Caregiver encourages child's responsiveness.									
H. RESPECT FOR EMPATHY					1.	2.	3.	4.	5.
Caregiver encourages child's empathy development.									
I. RESPECT FOR COGNITIVE DEVELOPMENT					1.	2.	3.	4.	5.
Caregiver encourages child's cognitive development.									
J. RESPECT FOR SOCIAL-EMOTIONAL DEVELOPMENT					1.	2.	3.	4.	5.
Caregiver encourages child's social-emotional development.									
*OVERALL IMPRESSION: A SYNCHRONOUS RELATIONSHIP					1.	2.	3.	4.	5.

Appendix 3

Information of Interaction Rating Scale (IRS) : Description of Measure

Purpose

To measure the child's social competence and the caregiver's child rearing competence through observations of caregiver-child interactions.

Objects

IRS is appropriate for the assessment of interactions between caregivers and children from birth to age eight years.

Conceptual Organization

This rating scale includes 11 items, 5 items focus on children's social competences: Autonomy, Responsiveness, Empathy, Motor self regulation, and Emotional self regulation. Another 5 items assess caregiver's parenting skills: Respect for autonomy, Respect for responsiveness, Respect for empathy, Respect for cognitive development, and Respect for social-emotional development. And one item assesses overall impression of a synchronous relationships.

Item Origin/Selection Process

The items were selected utilizing the HOME (Home Observation for Measurement of the Environment, Caldwell and Bradley, 1974), SSRS (Social Skills Rating Systems, Gresham, 1990), and NCAST (Nursing Child Assessment Satellite Training) teaching scales (Barnard, 1994).

Materials

Non-copyrighted JCCC (Japan Child Care Cohort) version of the form is included in this manual

Time Required

Less than 5 minutes

Administration Method

Observation

Training

A training manual for the IRS has been developed for practitioners and researchers.

Scoring

The observer's evaluations of the items are scored. It clarifies the features of interaction for both items and total scores. Scores are on the five-point scale, (where 1=not evident at all, 2=not evident, 3=neutral, 4=evident, 5=evident at high level) measure assessment of caregiver-child interaction.

The observer completes the questionnaire composed of 5 items focusing on children's behavior toward caregivers (e.g., Child looks at caregiver's face as social referencing) and 5 items focusing on the caregiver's behavior. The observer then provides an evaluation on a 5-point scale for an overall interaction.

Reference

Anne T., Yato Y., Shinohara R., & Sugisawa Y. The reliability and validity of the assessment method for children's social competence: Parent-child Interaction Rating Scale. *Japanese Journal of Human Science of Health-Social Services*. 14. 2007; 23-31.

Caldwell BM. & Bradley RH. *Home Observation for Measurement of the Environment*. Little Rock: Center for Research on Teaching and Learning, University of Arkansas. 1974; 1-164.

Gresham FM. & Elliot SN. *Social skills rating system-Secondary*. Circle Pines, MN: American Guidance Service.1990; 1-223.

Barnard K. *Nursing Child Assessment Satellite Training Manual*. 1994

Appendix 4

幼児用社会的スキル指標

記入日 年 月 日：氏名 男・女 歳 月：記入者

各項目について、該当する欄に○をつけて下さい。

項目	いつも	時々	ない
1 だれかが話をしたら顔を見る			
2 だれかが話をしたら何らかの明らかな反応をする			
3 なにかしてもらおうと、うれしそうな顔をする			
4 気持ちを顔に出す			
5 あいさつをする			
6 人に近づきおしゃべりをする			
7 話をする時には顔を見る			
8 さそわれれば遊び仲間に入れる			
9 他の子に攻撃的な態度をとらない			
10 「あとで」と言われて待つことができる			
11 持っている物を他の子と分け合う			
12 人の話を最後まで聞く			
13 順番がわかる			
14 おもちゃの貸し借りをする			
15 必要な場面ではお行儀よくしてられる			
16 ほしいものがあっても説得されればがまんできる			
17 けがをした友だちを助ける			
18 さびしそうな友だちを元気づける			
19 だれかが失敗するとはげましたりなぐさめたりする			
20 だれかが上手にできたらうれしい			
21 だれかが上手にできたら「じょうず」とほめる			
22 いいと思ったらその人に「いいね」と言う			
23 友だちになにか頼まれると手助けする			
24 自分から友だちを手伝う			

あ・い

アタッチメント	5, 6, 14
育児環境指標 ICCE	14
意思の明示	15
1歳半健診	11
一方的なコミュニケーション行動	44

う・お

運動制御	15, 17
応答性	15, 17
応答性への配慮	17
おうむ返し	9
落ち着きがない	5

か

かかわり指標	1
かかわりの特徴	1
学習障害 (LD)	5
家族関係	14
葛藤	10
過敏	9
過敏性	46
関係性総合評価	17
感情制御	15, 17
感情をうまくコントロールできない	5
かんのむし	44

き

儀式	9
気になる子ども	5, 8, 10
虐待	6, 10, 31, 50
共感	15
共感性	15, 17
共感性への配慮	17
協調 (cooperation)	1, 12, 38
協調運動の障害	9
協調性 cooperation	14, 15
興味関心の限定	42

け・こ

経過観察	11
高機能広汎性発達障害 (HFPDD)	9
高ストレス	31
広汎性発達障害 (pervasive developmental disorder: PDD)	9
広汎性発達障害 (アスペルガー症候群など)	5
呼吸窮迫症候群	48
個性	1
個体要因	14
こだわり行動	44

ごっこ遊び	9
子どもの社会能力	1

さ・し

3歳児健診	11
視覚的手がかり	42
自己主張	15
自己制御 (self-control)	1, 12, 14, 15, 38
自己表現 (assertion)	1, 12, 14, 38
自信	46, 50
視線	9
社会情緒的発達への配慮	17
社会スキル評価システム	14
社会的相互作用の未熟性	42
社会的参照 (social referencing)	7
社会、文化的な環境要因	14
主体性	15, 17
主体性発達への配慮	17
巡回相談	11
衝動性	9, 50
情動のダンス	6
新生児仮死	48
新生児集中治療室	46

す・せ・そ

睡眠障害	9
精神発達遅滞 (MR)	9
生態学的な妥当性	12
早期から適切な支援	10
相互同期性 (interactional synchrony)	6

た

他児とトラブルが多い	5
達成感	42
多動	9, 46, 50
多動性	9

ち

注意欠陥多動性障害 (attention-deficit/hyper activity disorder: AD/HD)	5, 9
調和	17

て・と

低出生体重児	10
得意な領域をのぼす	46

な・に

内的ワーキングモデル (internal working model)	6
仲間関係の要因	14
乳児院	48
乳児健診	11

認知発達への配慮…………… 17

ね・の

ネグレクト……………6, 31

能力のパターン…………… 48

は

発達境界領域…………… 31

発達レベル…………… 48

バラツキ…………… 36

バランス…………… 34, 36

反復動作…………… 9

ひ

人見知り…………… 46

敏感性 (sensitivity) …… 6

ふ

フィードバック…………… 48

不器用…………… 44

不注意…………… 9

不適切なかわり…………… 31

へ・ほ

偏食…………… 9

母子手帳…………… 44

母子分離…………… 10

ま

マイペースさを容認…………… 44

よ

養育環境評価 HOME …… 14

幼児用社会的スキル指標…………… 1

幼児用社会的スキル指標 (Social Skill Scale for preschool children,SSS) …… 38

夜泣き…………… 44

り

理解…………… 46, 48

A

AD/HD …… 5, 31

Autonomy …… 17

E

Emotional self regulation …… 17

Empathy …… 17

M

MLERS …… 14

Motor self regulation …… 17

MR …… 31

N

NCAST Teaching Scale (NCATS) …… 15

P

PDD …… 31

R

Respect for autonomy …… 17

Respect for cognitive development …… 17

Respect for empathy …… 17

Respect for responsiveness …… 17

Respect for social-emotional development …… 17

Responsiveness …… 17

S

Social Skills Rating Systems…………… 14

SSRS …… 14

謝 辞

本書は、「気になる子どもへの質の高い保育」に向けた全国夜間保育園連盟の皆さんの熱い思いを形にしたものです。専門職として「根拠に基づく」プロ実践を推進している天久薫会長、枝本信一郎副会長、山縣文治顧問をはじめ、保育パワーアップ研究会の田中裕氏、酒井初恵氏、宮崎勝宣氏、小林昭雄氏、天久真吾氏、大島剛氏、連盟と保護者の皆様、元気に保育園で過ごす子どもたちに感謝いたします。

本指標の作成にあたり、Robert Bradley 教授 (University of Arkansas) には、国際指標の普遍性と文化性について、数多くのご指導をいただきました。また、Katharine Barnard 教授 (University of Washington)、Mary McCall 教授 (St. Mary University) には子どもと保護者のかかわりの評価法と専門性を保証する養成研修、Uma Segal 教授 (University of Missouri) には国際的な妥当性についてご教授いただきました。

本指標は、科学技術振興機構社会技術研究開発センター「脳科学と社会」計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」で妥当性の一部を検証しました。小泉英明総括、山縣然太郎統括、定藤規弘統括補佐、前田忠彦統括補佐をはじめメンバーの皆さまには多角的な視点からご助言いただきました。心より御礼申し上げます。

なお本指標の開発と妥当性評価に関する研究は、科学技術振興機構、文部科学研究、厚生労働科学研究、医療福祉機構、三菱財団の助成をいただきました。厚く御礼申し上げます。

安梅 勅江

執筆者

- 安梅 勅江 (筑波大学大学院／教授) …… 第1章3節、4節、第2章、第3章、第5章
- 矢藤 優子 (立命館大学／准教授) …… 第1章1節、第4章1節
- 山川 紀子 (三重中央医療センター／医師) …… 第1章2節
- 塩川 宏郷 (東千モール日本大使館) …… 第6章
- 篠原 亮次 (筑波大学大学院) …… 第4章3節、4節、第5章
- 杉澤 悠圭 (筑波大学大学院) …… 第4章2～4節、第6章
- 童 蓮 (筑波大学大学院) …… 第4章4節
- 田中 笑子 (筑波大学大学院) …… 第4章3節、4節、第6章
- 渡辺 多恵子 (筑波大学大学院) …… 第4章3節
- 恩田 陽子 (筑波大学大学院) …… 第5章

気になる子どもの早期発見・早期支援

定価（本体 1,800 円 + 税）

2009 年 10 月 16 日 初版発行

編 著：安梅 勅江

編集・発行：株式会社 日本小児医事出版社

〒 160 - 8306 東京都新宿区西新宿 5 - 25 - 11

TEL : 03(5388)5195 FAX : 03(5388)5193

URL : //shoni-iji.com

印 刷：株式会社デイ・エス

Printed in Japan 2009

本誌掲載記事の無断転載をおことわりします。

ISBN978-4-88924-186-0 C3047 ¥1800E

日本小児医事出版社

ISBN978-4-88924-186-0
C3047 ¥1800E
定価(本体 1,800 円+税)



9784889241860



1923047018007

日本小児医事出版社